まんさくの里栃尾に

大地の牙

被災者の声

『まんさくの里に大地の牙』

表題の意味

まんさくは栃尾地域に広く樹生し、春は残雪の中で春を告げる花であり、また、電気・ガスが一般家庭に訪れる前の燃料が山林であった時代には、まきを束ねることに欠かせない柔らかくしなやかな木であり、黄色や赤の花を咲かせる。

大地の牙は私達の棚田を崩壊させ、地下水までも奪い幸せな家庭も壊し、静かに肩を寄せ合い生きる静かな山村に牙をむき出した地震。大気汚染などの環境破壊で異常気象を引き起こされ、私たちに痛めつけられる地球という星からの警告であるのか。過疎の村にいっそう拍車をかけた大地の牙であった。

千 野 義 夫

表紙写真提供：大関　仁

震災文集発行に寄せて

平成16年12月26日、私達、長岡市栃尾地域（旧栃尾市）北荷頃応急仮設住宅住民は69世帯205人で行政区設立総会を開催、住宅団地区が発足しました。

この年は7月13日に五百年に一度と言われる豪雨に見舞われ、そして10月23日PM5:56に川口町を震源に震度7の中越地震が発生しました。

その時、私は妻と妻の兄夫婦の四人で山形県に旅行に出かけていて、家には93歳と82歳の両親が留守番をしていました。うずくまる二人を区長さんや本家の人たちが世話してくれた有り難さと老夫婦を残し旅行に出ることを話しておいてよかったという思いで一杯でした。

11月8日は秋晴れで、避難場所から皆さんが変わり果てた我が家へ向かい、片付けに追われていました。そんな時、聞いたことも無い地鳴りと共に大きな余震が襲いかかって来ました。四方から聞こえる立木の根の切れる音…これも初の経験だった。

私達の地は室戸台風と伊勢湾台風以外に天災はあまり聞かない。雪国で雪の降るのは当たり前、『地震・雷・火事・親父』の例えの地震の怖さを思い知らされ、狂わせられた人生とむなしさを文字に認めることを呼びかけ、原稿用紙を全世帯に配布してお願いした。

国際ボランティア学生協会（IVUSA）、新潟大学、中越復興市民会議、社会福祉協議会の皆さんの協力で聞き取りで文書化し一冊の文集にする事ができたことは若い人たちの協力があってのことです。

二年間という短い時間の中で再建と再建の目処、地震の場合地盤が安定せず難しく時間を要する事と年齢や資金等々悩みの尽きぬ中、二年目は団地を花一杯にすることにした。

950本の花とコスモスの種1キロに3000本のひまわりを植え、皆で手入れし心を癒すことと若い学生さんと一緒に平成16年豪雪の屋根の雪下ろし、避難経路確保の雪処理作業等々、春は花植えと住宅周辺の草むしり作業中などや食事を共にしながら語り合う。これも回を重ねる事で孫と爺ちゃん婆ちゃんと家族になってこその会話の中から復興への力となってきたと思う。

この震災文集も多くの方々のご協力とご支援で発行出来た事と多くの個人・団体等から私たちを励まし多種多様面からご支援下さった事は仮設住宅団地住民一人一人が生涯忘れることができない二年間となりました。

「出会いが有れば別れが有る」

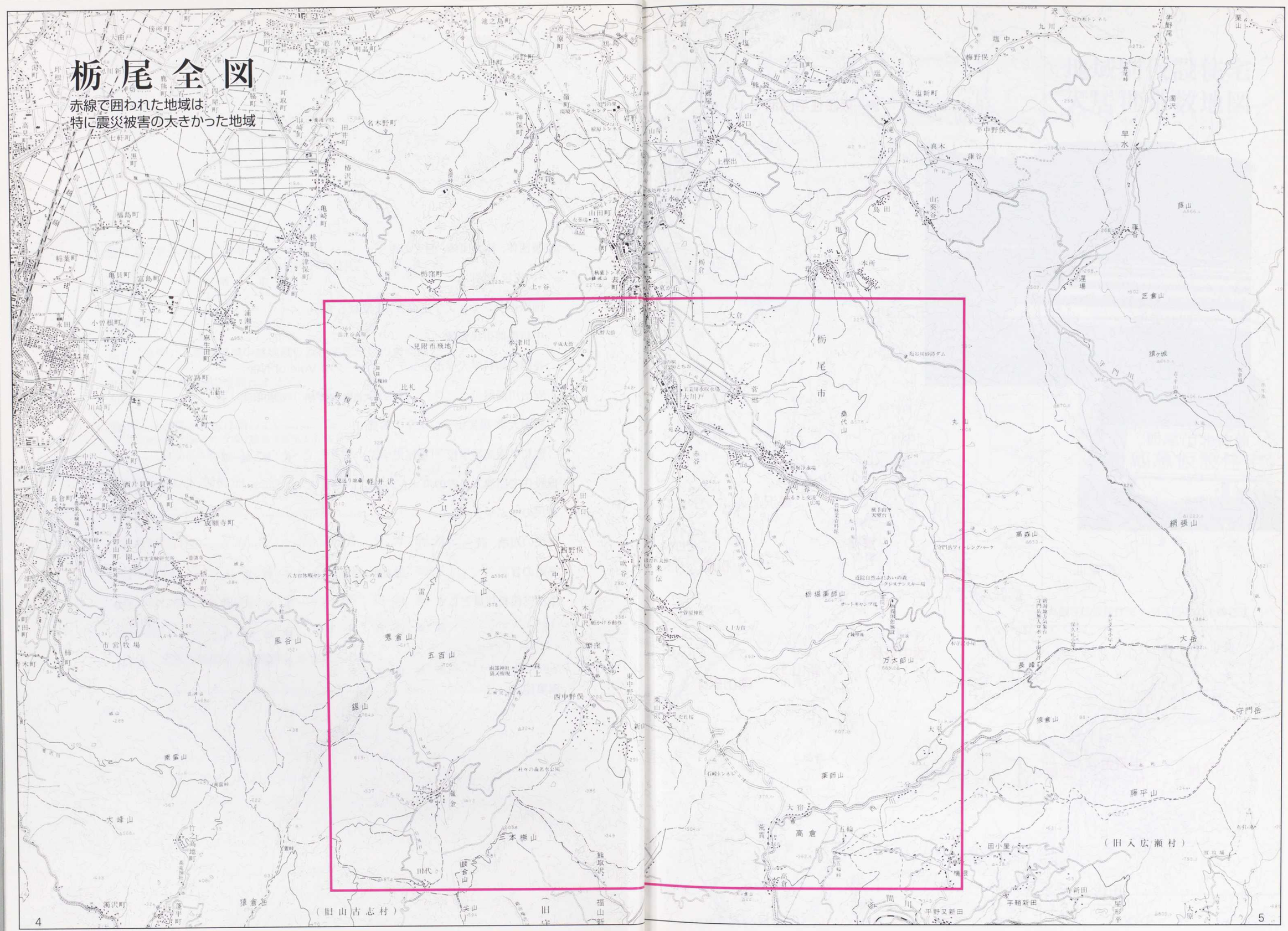
そんな言葉は私たちには無いような気がする。お互い励ましあった皆が同じだからだ。

一緒に屋根の雪下ろしや花植え、住宅敷地の草むしりなど都会の学生とは思えないという、住民の声と学生さんの次は何処をと、次への指示を求める声、順調に進む作業と作業中の学生との会話は私達の後々に語られる、杜々の森での交流会、ふるさと交流会館での交流会等々、一人々のあの時の顔や言葉が懐かしく思う。私達の地域の再発見に栃尾に足を運んでいただき交流を続けてもらいたい気持ちとご支援ご協力くださった多くの方々に感謝申し上げます。

仮設住宅団地区区長　千　野　義　夫

栃尾全図

赤線で囲われた地域は
特に震災被害の大きかった地域


栃尾市
栃堀薬師山
万太郎山
薬師山
高倉
大宿
五百山
鬼倉山
錦山
三本橋山
大平山
雷
西野俣
中野俣
西中野俣
東中野俣
大倉
見附市飛地
軽井沢
比礼
北荷頃
本津川
平成大橋
高津谷橋
栃堀下
見送り地蔵
大川戸
宮路
乙吉
麻生田
浦瀬
小曽根
永田
堀合
稲葉
福島
亀貝
富島
水六
桂
加津保
亀崎
椿沢
名木野
田井
神保
牛嶽
岩野
池之島
原
鶴島
太田
氷沢
耳取
熊倉
七軒
高見
大曲戸
傍所
上新
熊倉
池内
明出
中沢
十日町
西片貝
東片貝
長倉
成願寺
悠久山公園
御山
栃吉
市営牧場
柿
風谷山
南蛮山
大峰山
竹之高地
濁沢
猿倉岳
（旧山古志村）
福山新
熊取沢
峰倉山
田代
城倉
森上
南部神社
猿又権現
杜々の森名水公園
吹谷
本山沢
蛸かけ石観音
来伝
赤谷
桑代山
高森山
綱張山
大岳
長峰
守門岳
猿倉山
藤平山
（旧入広瀬村）
田小屋
寺新田
羊精新田
星形平
平野又新田
大原
塩谷川砂防ダム
守門岳フィッシングパーク
道院自然ふれあいの森
クレスデンスキー場
オートキャンプ場
真木
薄谷
平中野俣
上塩
塩新町
梅野俣
塩中
九川
牛野尾
栗山
早水
藤山
芝倉山
猿ヶ城
下塩
塩谷山
能袋
上樫出
樫出
山口
島田
山葵谷
本所
塩谷
大倉
菅沼
上方谷
栗山
石岸トンネル
荒貫
五輪
塩谷
境
問川
上谷
東が丘
栃窪町
栃倉
栃窪
山田町
桜町
水六町
浦瀬町
麻生田町
宮路町
乙吉町
十日町
西片貝町
東片貝町
成願寺町
栃吉町
柿町
木町
湯沢町
蓬平町
栃尾
大平
大宿
高倉
五輪
荒貫
塩谷
境
問川
上方谷
東が丘
栃窪
栃倉

地域別仮設住宅入居世帯数地図

仮設住宅団地

比礼③

北荷頃②

栃堀①

小向②

軽井沢①

田之口①

下来伝①

中⑤

寒沢②

繁窪②

松尾②

森上①

西中野俣⑤

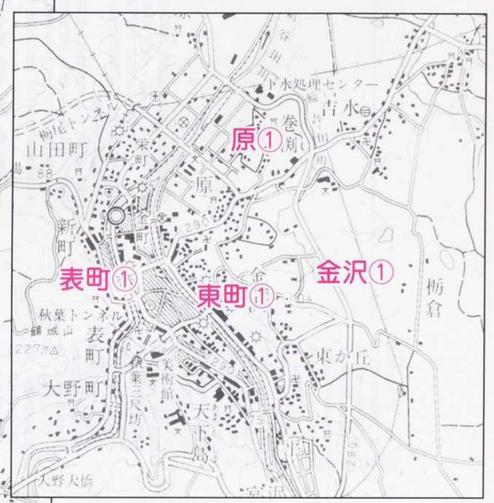
新山③

栗山沢⑨

半蔵金㉓

田代③

丸数字は仮設住宅への入居者の人数です。



栃尾地域の復興によせて

長岡市役所 栃尾支所長　稲　田　　悟

忘れもしない二〇〇四年十月二十三日、土曜日、住民投票による長岡市との合併可否についての投票日を明日に控えた夕方でした。

一週間をかけ期日前投票の締め切りがもう間近い夕方、夕食を済ませてから結果を確認に出かけるつもりでいた“夕方五時五十六分”大きな音とともに家が揺れ、「震度6弱」を記録しました。

家の明かりが一瞬の間に消え、真っ暗闇である。しかし、すぐに明かりが戻り、家の中で物が倒れたり棚から落ちたもので散乱している。その後、二回の大きな揺れがきて、地震の被害が心配になり、急いで市役所に駆けつけました。

市役所は停電しており、塔屋から水がもったり大変な状況でした。休日でもあり、職員の数も少なく、現状の被害状況の確認が取れない状況でありました。

その状況などから災害対策本部を設置、職員への非常呼集を行いました。その後も震度4以上の地震が数え切れないほど発生。住家被害は六千件を超え、川口町近辺を震源地とした中越地域一帯に被害をもたらした大地震であり、「中越大震災」と名付けられました。

避難状況や被害状況が解ってくるにつけ、避難所の設置、食事の手配など時間を争う状況でありました。

幸いにも栃尾市は市役所を中心とした市街地に思ったより被害が少なく、また、被災地域のコミュニティの形成がしっかりしており各区長さんなどの判断で避難などの対応がうまく行きました。改めて地域コミュニティの大切さを痛感いたしました。

市民への情報提供はマスコミを通じてお知らせしておりましたが、テレビは停電しており地元というより市外向けであり、被災地はラジオでありました。

市外からの救援物資や人的な支援などは驚くほどの支援をいただき、大変元気付けられたものでありました。

徐々に被害状況がわかるにつけ、時期的にも冬間近かな時期でもあり、家をなくした方や家に戻れない人たちが一時的な避難場所として「仮設住宅」の建設が必要となり、避難者の状況把握より雪の季節が来ないうちに設置するため、百五戸の仮設住宅を設置したものでありました。建設場所の選定にあたっては、被害地域が市域全体であり、その中でも市街地は比較的被害が少なく、入居希望者もいくつかの集落にまたがるため分散するより一箇所に集約し支援体制が容易にとれること、近隣に病院、スーパー等に近いことなどを理由に、市内北荷頃地内の工業団地用地を一時的な場所として整備したものであります。結果は正月を前に希望者の入居を完了いたしました。

六十五世帯、二百三人の北荷頃住宅団地区の誕生であります。各集落から避難された方々のため、団地内でのコミュニケーションの形成に配慮し、一つの区としてまとめ体制の構築協力を求め、避難者から中心的な区長、役員を選んでいただき、親睦を重視した中での共同体として自立までの住まいとしていただいたものであります。

異なる集落からの集合体の上、地域性や年齢的にも差がある中をまとめて今日まで大きなトラブルもなく過ごされたことは、区民の皆様のご理解や区長をはじめとした役員の方々の大変なご努力のおかげであると思っております。

仮設住宅での生活は環境の変化とともに大変であったと推察いたします。各方面からのボランテア、慰問によりいろんな元気をいただき、畑作、除雪、花植えなど団地での生活を過ごされました。

一昨年の豪雨災害の後、大地震、大雪と一生涯に経験しないであろう大きな予期せぬ災害を一時に経験され、生活の根底から崩壊した被災者の皆様が、苦難を克服し、元の生活に戻れることを願いながら復興の意欲をもたれ頑張っていかれるものと信じてやみません。

復興が進むにつれ仮設住宅から自立され、新たな形での生活が始まります。仮設住宅での絆は記念文集の発行、という形で皆様の心に残ります。皆さんが味わった緊張と苦労、それらの声がまとめられた文集を、行政として今後の防災対策に大いに活用させていただきます。

いろんな形での暖かい支援、ご厚情を賜りましたボランテアの皆様、全国からのご支援、本当にありがとうございました。

この災害から人の親切の輪が広まり、復興への心強い味方として、市民一丸となって復興に取り組むことを誓いまして、心から御礼を申し上げます。

本当にありがとうございました。

中越大震災に際して

社会福祉法人 長岡市社会福祉協議会栃尾支所 支所長　大　橋　克　朗
（旧栃尾市災害ボランティアセンター 本部長）

平成十六年十月二十三日、午後五時五十六分、土曜の夕方、家族とのひとときの団欒を遮る突然の激震でした。

町中の明かりが消え、確かな情報がほとんど届かないまま何が起きているかも理解できない中で、度重なる大きな余震に戸惑う家族を残し、被害の程度と社会福祉協議会としての対応を協議するため事務所に駆けつけました。事務所は予想通り書類等が散乱した状態、庁舎内の被害を確認しているうちに主だった職員が徐々に集まってきました。私は、備蓄している救援物資の搬出準備について指示を出すと、市役所へ情報収集に向かいました。確実な被害状況は分からないが、予想を超える大災害であるということは容易に理解できました。西谷地区に大きな被害が出ていること、栗山沢では道路が寸断し孤立していることなど次々に具体的な被害状況が分かるにつれ、社会福祉協議会として「何ができるのか？」、「何をすべきか？」について深く考え、責任を強く感じるようになりました。

翌日、行政の災害対策本部設置を受け、社会福祉協議会でも関係する福祉団体等からなる「栃尾市災害ボランティアセンター」を設置しました。行政機関のみによる災害対応には限界があるため、「自助」、「共助」の助け合い活動を推進する団体である社会福祉協議会としては、関係する機関団体とのネットワークを最大限に活用して震災による生活復旧活動を円滑に支援しようというものでありました。当初の予定では、家財の片付けを中心とする生活援助を重点的に行うということでありましたが、初めて目にする「ボランティア」支援の定着には若干の時間を要し、実際は莫大な救援物資の仕分けに多くの時間を要することになってしまいました。しかし、その後、県内外から駆けつけてくれた多くのボランティアには、仕分け作業のほか避難所の手伝いや家財の片付け、時にはお年寄りや障害をお持ちの方々への介助など取組んでいただいた。その行為は「とちお」の人々に好感を持って受け入れられ身近な「ボランティア」として確実に定着することになりました。

平成十六年十二月末には、仮設住宅団地の設置と入居完了をもって一往の生活復旧活動が終ったと捉え「栃尾市災害ボランティアセンター」を解散し、新たに被災者の生活再建を目的とした「栃尾市復興ボランティアセンター」をスタートさせました。また、平成十七年度には、住宅団地内に事務所を設置するとともに生活支援相談員二名を配置し、団地内や被災地域内の見守り活動やコミュニティ機能の活性化への支援に力を入れるとともに生活再建意欲の向上を目指した取り組みに協力させていただいております。

異なる地域から転居し、慣れた居住空間とはまったく異なる中での生活は、辛く心細い日々であったと推察いたします。そのような中でも区長を中心に親睦と協調を目的とする様々なイベントを企画実施され、心ひとつに取組んでこられた住民の皆様のご努力は大変なものがあったと思っております。夏祭りや賽の神、花植えや茶の間などでの交流を重ねる中で団地住民としての結びつきを強くされ昔からの友人であったかのような関係が築き上げられたことも苦難の中にあって大きな財産となり生活再建の大きな力となったのではないでしょうか。

今回の文集発行についても、「未曾有の大震災に身も心も打ちひしがれた被災体験」としてでなく「仮設団地で支え励ましあった絆の記し」として、傍らに新しい生活をスタートしていただけたらと考えます。

今回の震災に際しては、全国から沢山のボランティアが被災者の方々への支援・被災地の復旧に活躍されました。時には東京の孫として、時には力強い助っ人として、住民を勇気づけていただきました。あたたかな支援、ご厚情をたまわりました全ての方々に敬意を表するとともに、心より感謝申し上げます。

私ども社会福祉協議会は、今後も被災された方々の復興への歩みをしっかりと見守り、災害支援活動で培った人間関係を大切にしながら行政や関係機関とともに一人ひとりの生活再建を応援し続けてまいります。

最後に皆様が元気で、健やかなる事をお祈りいたします。

一人ひとりの復興を、全国が応援しています。

仮設住宅に住めて良かった

椛　沢　ク　ラ

平成十六年十月二十三日、私達家族はごはんを食べにと思って、自分の部屋から出てきたその時に急に持ち上げられたみたいな感じがしました。私は地震とも思わなかったので、母さんに「何したの」と聞きましたが、母さんは台所にいておつゆ鍋をもってこようとしたときで、ガス台ごと鍋が大きく動いて驚き、ガスの元栓を止めに真剣だったと言っていました。私はまだ地震と考えませんでした。その時、父さんは土曜日で家にいましたので、「大丈夫か」と台所の母さんの方へ向かいました。急いで飯台のところへ来ました。そのときは電気も消えました。すぐまたついたけどそれもまた消えてしまいました。父さんから懐中電気を一人一人に預けられました。そしてガラス窓はみな割れていて「スリッパはいて」と母さんに言われましたが、そんなことしていられませんでした。「座布団頭にのせて」と言われて、座布団を頭にのせたまま外へ三人で出て学校のほうへと走りました。そして、部落の商店の大きな車の中へ入れてもらいました。近所の方も一緒に入れてもらいました。車の中に入っていても大きな余震が続きまして、「おっかない」と言っていた人もいました。

ようやく朝になり、車の中から出始めたのですが、私一人残されたままで車から出られない。誰か来て欲しいと思っても、誰も車を開けてくれる人は来ない。そこへようやく、部落の人が目の前に来られて、やっと車から出て。自分の家の方へ行くように言われましたが、皆さんが避難している部落のセンターへと向かいました。そこで、おにぎり一個もらって二階の広間に上がりました。それから町の方からおにぎりが届いてお水ももらいました。

センターにて１泊し、二十四日の朝にこのセンターは危ないと言われて元の学校へと向かい、自分たちのいる場所をこしらえたところへ、私の孫が来て、「長岡へ連れて行く」と言ってくれて長岡へと向かいましたが、道が壊れていてなかなか長岡へ着きませんでした。長岡に着いても車が多いため一尺ずつ進む位で、目的地の家に着いたときは、半蔵金を出てから二時間もかかったと言っていました。

着いた孫の家も半壊状態でガスもなく石油ストーブが一つで、煮炊きするというのも大変な家でしたが、ようやくラーメンを作ってくれました。それを食べて寝ましたが、半蔵金にいた時に二階から色々と落ちてきて体にあたった時の痛みは出てくるし、ハシさえ使えないようになりまして、慣れないスプーンではとても大変でした。

翌日、病院に連れて行ってもらい、骨は折れていませんと言われて帰りました。

長岡で四十日間お世話になり、仮設が出来たと知らせてもらった時の嬉しさは、嬉しいやらありがたいやらで、一生忘れられない思い出になりました。それから仮設住宅に着いた時は、たとえようのない嬉しさでしたよ。住むところを用意してもらって本当に嬉しかったです。

来年の十月には仮設を離れなくてはならないそうですが、その時までは住むことが出来ると思います。仮設に二年も一緒に暮らす皆さん方とお別れすることはつらいだろうと思いますが、その後またお会いできることを楽しみに思っているところです。全国の皆さん方より頂き物ありがとうございました。心から嬉しく、思います。

負けるな！私

井　田（栗山沢）

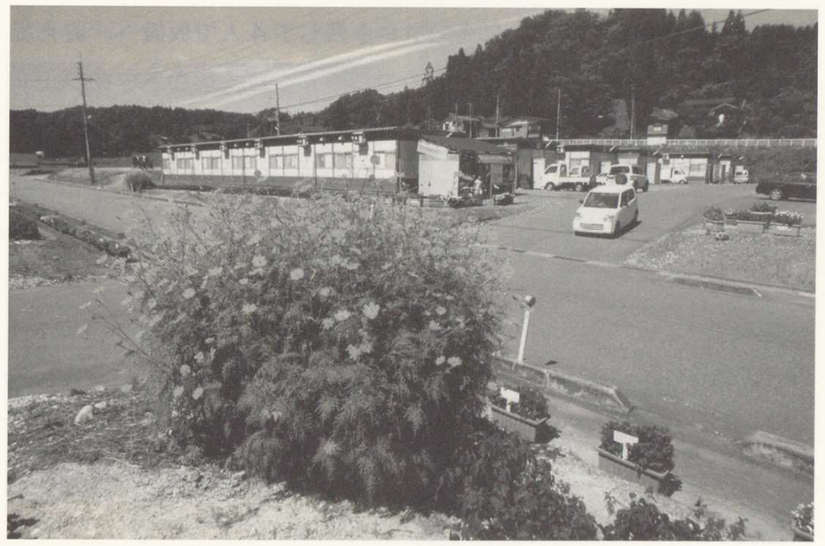
あの日、一瞬の出来事、何が起きたのか・・・
一晩のつもりでセンターへ避難。が、一月あまりの避難所生活、道路の陥没、車も通れない孤立状態。
そんな中、ボランティアの方々や全国各地からの救援物資、本当にありがたく、頭の下がる思いでした。今の若い人は・・・と言うけれど、若い人達が本当に一生懸命やってくれました。
現在、仮設での生活。家には住めず、これからどうするのか・・・
「収入〇〇以上は、支援されません」でも、大学生２人と高校生、子供達にお金がかかるのに・・・
そんなことは、全然考慮されず・・・
あと一年半・・・
だんだん仮設を出る人も増えてくるだろう・・・
う～～～ん、どうする？
これから暑くなってくるので、体調を崩さないように、明るく元気に、と自分に言い聞かせ・・・
『ファイト！！』

あの電話がなければ

金　内　よし子

会社の仕事が、休みで、作業場で家の仕事をしていたら、10月23日夕方、忘れられない地震が来ました。自分の予定では、長野の実家に用があり、朝出かけて日帰りで行ってくるつもりでしたが、電話で孫がこちらに来るというので実家行きはやめました。あとで考えたら、テレビで報道されていた皆川さん親子の事が実家から夕方帰る自分と重なる気がしてゾクッとしました。実家へのいつものコースです。偶然とはいえ、孫が地震予知していたのか、とも思えるのです。

（編集部注：被災者は逃れようのない震災のなか、孫の電話というひとつのきっかけで、命を救われた思いを自分の幸運な運命と感じている。）



家は壊れたけど、地元に帰ります

姉　崎　かずい

突然揺れた。その家は全体が傾いていた。
もうダメだ、生活できない。震える体で呆然と見上げた。
「地震」だとは。

揺れが長くあわててガスの火を消し、やっと外にとび出した。夕食の天ぷらを揚げていた時だった。
次々と余震がくる。寒くて暗い。全身、震えが止まらない。介護する母に、ふとんを一枚多く掛け、ホッカイロを与え、息子と夫と私の三人で外に出て近所の人達と集まる。皆何もできずただ怖くて震えているだけ。どうすることもできない。家族の愛犬、コロもガタガタ震え、車の下にもぐりこんだまま。続く余震、この先どうなるんだろう。

10月27日の5.0強の余震、11月2日の5.0弱の余震で、更に多くの物が倒れたり、落ちたり、食器が割れてどうにもならぬ。片付ける気もなかった。大事なトイレも壊れた。

これでは生活できず、自分には無いと思っていた仮設住宅に入居することに。壊れた自宅に、可愛いコロを残して4人で仮設へ。震えて鳴いているコロを・・・。離れての生活のつらさ、切なさで涙が止まらなかった。

それからは毎日朝、夕方の2回ごはんを持っての通いが始まった。車の音で喜んで、ちぎれる程にしっぽを振って待っている。コロと私のうれしい時間なのです。

仮設住宅での生活では色々な地域の方とめぐり会え、お話できたりお茶会ができ、たくさんの交流も生まれました。お互いに励まし、助け合いも協力も。住民皆のつながりが大きくなり、たくさんの思い出もつくりました。

今まで住んでいた場所には家を建てることができず向い側の車庫を増改築して生まれ育った北荷頃、ふるさとに家族4人＋コロちゃんと楽しく元気で暮らしたいと願っています。

7.13水害で地盤がくずれ、何とか土止め工事も終わりこれで安心して生活ができると喜んだわずか3日後、

10月23日　午後5時56分　M6.8　震度6.0強
新潟中越地震・・・だった。
もう二度と無いように祈っている。

全国の皆さんからたくさんの心温まる力。応援、励ましの言葉などに助けてもらい、そして生活用品も頂き深く感謝しております。
本当にありがとうございました。

人間生きているうちに、こんなこともあるんだな、を体験
わが家族は住みなれた北荷頃、中崎にかえります。

災害にあって

酒　井　中

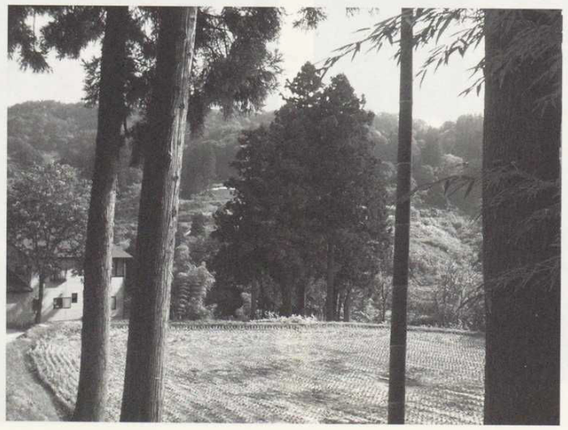
平成16年は、一生忘れることのできない年となりました。

７・１３水害に始り、中越大震災により住宅・農地・道路など多大な被害を受けたところに、追い討ちをかけるような豪雪と、本当にすごい年でした。現実を振りかえってみることが怖く何度も夢であってくれればいいと願わずにはいられない日々が続きました。

失った物もたくさんありましたが、自分の事以上に親身になってくれました行政の皆様、会社、親戚、先輩、後輩、名前も顔も知らない方々の善意など、得たものもたくさんあったように思います。

早いもので仮設住宅に引っ越してきて、七ヶ月が過ぎようとしています。新築する人、復旧する人、解体する人、中古住宅を購入する人など、それぞれに決めた人が多い中、いまだにどうするか決めかねています。早く決めねばと気持ちは焦りますが、もう少しゆっくりと考えたいと思います。

あとどれくらい仮設住宅でお世話になるかわかりませんが、それまでよろしくお願いします。



『One For All —All For One』

栃尾仮設住宅団地　十八号棟一

諸　橋　政　信

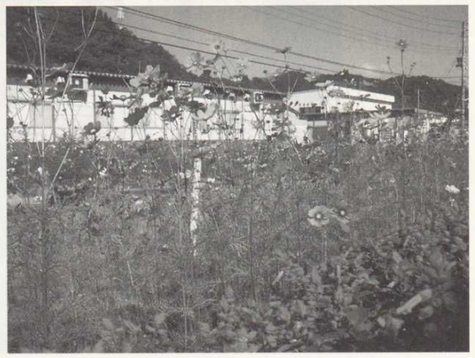
２００４年１０月２３日この日は、生涯忘れも出来ない恐怖と何も出来ない人間を実感した一日になってしまった。生まれ育ったこの地が大きく鳴り響き、そして突き上げる様な大きな揺れ、『いつになったら、治まるんや』家族・愛犬はこの日一睡も出来ず、車の中で寒さを凌いだ一日になった。それから一ヶ月半後‥‥　仮設住宅に入居し新たな生活をスタートしました。しかし、今までと違い隣近所は見ず知らずの方ばかり、当初は、ここは一時的な住まいと考えていました。ある日、コンコンとドアを叩く音がしてドアを開けると前の部屋の男性が立っていました。開口一発「この５班の班長やってもらえないかの」と依頼され断る理由も無く引き受けさせていただきました。これを機に、仮設住宅の住民の方々と繋がりはじめ色々な話をする機会が増えてきました。　付き合えば付き合う程、やりきれない気持ちを抑えている住民の方々が明るく接してくれ、一時的な住まいと考えていた事を考え直しました。　まず、十一世帯（５班）でこれからの暑い夏を乗り越えると共に、同じ班の親睦を深めようと老若男女、バーベＱ大会を行い全て持ち寄りで夜遅くまで互いの家の事や、これからの事など楽しい時間を過ごしました。これを機に５班だけではなく仮設住宅団地全体で納涼祭を実施しては、との声も上がり地元お盆の忙しい中、住宅団地住民でバーベＱ・カラオケ・田代で眠り続けた太鼓での盆踊り・最後の後片付けまで住民が一つになり納涼祭を盛大に行う事が出来ました。　これ以降、住宅団地内だけではなく、その年の豪雪で雪下ろしに来ていただいた新潟市・関東・関西からの学生ボランティアとも親睦を深め『輪』から『和』へ変わっていきました。　一人の力はたいした事がなくとも、その力が一つになれば大きな力になり、変える事が出来ない事も変える事が出来る。『個人が全体を　全体が個人を』

災害で失う物も多いが、得る物も多いのではないかと思います。

以前、富山県のある小学生達に災害に対するアンケートをお願いされました。アンケートの結果は、危機感ある内容でした。ところが、一年経ち同じ内容のアンケート結果はその当時の危機感が薄れた様な結果が‥‥この結果は、良い事なのか悪い事なのか私にはわかりませんが、私は、いつも危機管理意識を持って、これからの人生を生きていきたいと思います。

最後に、栃尾仮設住宅団地の住民の方々、ボランティアの方々、そして栃尾仮設住宅団地に携わった方々へ『ありがとう』。

‥‥‥　秋桜を見ると思い出します。　‥‥‥



100歳まで頑張る。

諏佐ヒデ

昔の人は良く、地震、雷、火事、親父といわれたことを聞いておりますが、本当に88年も生きていて、こんな目に合ってしまい、二度とこんな目に会いたくないです。県知事さん、市長さん、上に立っておられる方々のおかげで、日本国民皆々様のおかげで日々何不自由なく過ごさせていただいて本当に手を合わせて喜んでおります。

地震のときはあっという間の出来事で、逃げるのに命がけでした。やっと外に出ました。その時は月夜で助かりました。雨が降ったりしていると、もっと惨めな思いをしなければなりません。夕飯前でしたので、お隣の人からパン一個いただき、車の中で一夜をあかし、翌日は新山のセンターで泊まり、三日目は隣村の子供の家に行って、二十日あまりお世話になって、その後は東京の娘が迎えに来てくれたので、東京に40日間もお世話になってきました。そのうちに栃尾にいる娘が東京に孫が生まれたので顔を見にきたら、私も新潟に帰りたくなって、お正月が終わってから帰りなさい、と言われたけれども、無理やり帰ってきました。

帰ってきてよかったと思いました。こんな良い所に住居してお正月前は色々な品物を頂き何不自由なく良い年を迎えられて本当に心から感謝いたし、手を合わせて喜んでおります。

日本中の人に頑張ってと応援していただき、100までも頑張るつもりですからよろしくお願いいたします。こうして過ごされるのも、皆々様のおかげです。本当にありがとうございました。これからもよろしくお願いいたします。

中越地震に遭遇してから

千野義夫

私は十月二十三日朝早く妻の兄夫婦と四人で、他県から嫁ぎまだ行ったことがないという妻の兄嫁の希望で山形の観光に出かけた。一日目の観光を終えて妻のお気に入りの胎内パークホテルのチェックインをすませ部屋で一杯飲み、宴会前のお風呂に入り脱衣所の外で妻の風呂上りを待っているそのときに、連続で来る大きな揺れにおそわれた。風呂上りの多くの人がうろたえていた時、私の耳にテレビの報道で震源地は長岡だとの情報がはいった、家には九十二歳と八十三歳の両親と、妻が私よりも愛しているチンチラのみみちゃん、♂猫が留守番をしている。携帯電話は駄目だ。どこの公衆電話も長い行列だ。通じない電話を掛け続ける人達が大勢いた。四人がすでにお酒も飲んでいる。どうにも動きが取れず留守番をしている家族や家のことで頭の中は一杯の時、宴会の準備が出来たとのルームコールで案内され宴会席に付いた。時々ゆれの来る中で形だけの乾杯をした。地震さえなければ楽しいはずの宴会の飲み物も食べ物も咽を通らない。四人の会話も、聞こえてくる会話も地震の話だけ。私は携帯を懸け続けいた。感度が悪く時々切れたが親しくしている友達の携帯にようやく接続し、暗い夜のことで状況は良くは分からないが、部落の様子を見に本家の人と従兄弟の区長家族が屋外を見回ると暗闇に肩を寄せ合っている私の両親を見つけて、自分たちの車に避難をさせてくれた事を告げられて有難く涙が出た。

旅行に出る事を従兄弟にあたる本家の人に告げてきて良かったとつくづく思い、一先ず胸をなで下ろし四人で明日の朝早く帰る事にした。ホテルのフロントに事情を話すと特別に朝食を早めに用意すると言われ感謝の気持ちで一杯になった。明日の予定を組んではじめてビールを口にする事が出来た。

翌朝早く朝食を済ませコンビニで食料を買い込み一路我が家を目指した。何とか家に着くことができたが途中の時間の事は全く記憶にない。

部落に到着し、あちこちで疲れきった住民が車を寄せ合い寝不足と恐怖感で目をうつろにしている光景を目にしたのち、今まで体験した事の無い重苦しい雰囲気のなかで、昨晩は停電で暗闇の中での、住民の恐怖感を口々に聞かされ言葉も出せず聞き入った。家族と住民の無事を確認し老夫婦を世話してくれた人達に感謝して避難所から我が家に向かった。

我が家を目にした時、地震の恐ろしさを実感し但家族の無事だけを喜ぶ事で満足するよう自分に言い聞かせた。昔の例え話にある「地震雷火事親父」の中でも一番にある地震の怖さを改めて実感した。

それから車での生活がはじまった、学校も地域センターにも入れず車での生活しかなかった。トイレが無く夜はよくても昼が困り、男性も女性も山中や草むらに用足しをすることが続いた。その時思った。山間地で良かった、都会では出来ないことが自分たちには出来るんだと。歌の文句ではないけれど電気も電話も水も駄目。トイレも駄目、そんな生活に疲れ親戚や知人、県外の身寄りの所へと部落を離れる人も出始めた後、部落に残った人は行くところのない人と家を守るための人だけとなった。

余震も少なくなった頃、このセンターの建物が全壊は無いだろうとの話が出始め、区長と話し合い区のセンターの一階部分の回りにシートを張り避難所にする事になり二十五人ほどの人が肩を寄せ合い生活を始めた。余震で外に飛び出すことがあっても大勢で居ることに安心感があったからだ。木造の自宅は恐く、蒲鉾型の車庫や車の中に、少しでも自分の家の見える近くにと住民は分散した。

区長は区内の総括、私がセンターの一階部分の避難所担当で、この避難所が地域で避難する住民が一番大勢のときには二十五人で生活した。

避難所のみなさん用の支援物資調達や生活全般の面倒を見るのが私の仕事となった。風雨の夜なんかシートが飛ばされ雨が顔に当たる。床には雨水が入りぬれてしまい、とても寒く、二つのストーブを常に点けても眠る事が出来ない夜が多かった。昼は夜の風雨で剥ぎ取られたシートの修復と食品調達で忙しく、一日が短く感じる日々が続くうち家に帰る人もでてきた。余震も少なくなるとの考えと寒さからだ。

今までお話した避難生活は苦しく日に日に人数も減り、私の家族も家に戻ってみることにして帰ってみたが、ちょっとした風による揺れと軋みの音で、家の中では日中も寝るときも作業着のまま、懐中電灯と履物を枕元に置き、就寝しても熟睡出来ない日々が続く。そんな日々に耐えきれず一日も早く仮設住宅に入居できる日を待ちつつ農地の見回りをする事にした。歩いて行くしか無くなった坂道を歩き、変わり果てた棚田を見ながら自分の田へと急ぎ、そして目にした光景に愕然とした。棚田は崩壊し池の土手は崩れていた。田を後にして家に戻り家財を農作業場に移す準備中に、経験のない物凄い地鳴りに戸惑っていたその瞬間に大きな揺れ、十一月八日の地震だ。目の前の家では妻と母が家財を運び出す作業中の地震で、逃げ出さない妻に、「家がつぶれる早く出て来い」と大声で叫ぶと妻が「ばあちゃんが動けなくなり自分だけ逃げられない」と叫ぶ声に、もうこの世の終わりかと思った。

その時近くで、家屋敷が傾き雨水の逆流を元に戻す作業中だった従兄弟の区長と共に呆然と我が家をみているしかなかった。不気味な地鳴り、立ち木の根のちぎれる音、山の崩れ落ちる音、相次ぐ揺れで何時つぶれるかわからない我が家。二人で互いの家の壊れていく壁が剥がれ落ちるのをただ見つめ、そして潰れないでくれと祈っていた。幸い両家とも潰れることだけは免れた。

その後、待ちに待った仮設住宅に入居の日も決まったが、九十歳を越えた父には病気が有り3Kに高齢の親と私たち夫婦四人の生活は到底無理。二人を冬季間だけでもと関東の妹に頼んだ。十二月七日ようやく二次での入居の日が来た。長かった。

長岡に居る子供達の手伝いで引越しも無事終わり、狭いが安心して眠ることができる所だ。贅沢は言わない。まず潰れる心配も無い所だ。安心して眠れる、それが何より嬉しかったが妻との会話は尽きる事が無かった。

市が一つの行政区として運営するようお話があり、一役を自分が担当することになった。二十二の地域の人達で初顔の人も大勢居る。早く仲間になれるはず、それは同じ被災者だからだ。先ず顔を覚え話せる友達になる事を急ぎたかった。そこで応急仮設住宅区五班編成の自分の班でやってみる事にし、若い隣人たちと相談し計画に着手。幅広い年齢層を対象に呼びかけることを考え美味しい食べ物、生ビールが外で待っているので暑苦しい部屋から早く外に出てと呼びかけ、三十名以上の人が参加して、昔からの仲間の様になごやかな夏の夜を楽しんだ。この計画は大成功であった。住宅団地住民全員のイベント実施にも自信がついた。

共同作業に温泉日帰り旅行、温泉１泊旅行にクリスマスお楽しみ会、日帰り旅行での忘年会等々を実施して、仮設住宅住民一同の心の寄り場作りに専念した。

国際ボランティア学生協会ＩＶＵＳＡの受け入れに自分は期待するところがあった。若い人と共同作業をし会話が出来る、それが今の仮設住宅の人達には必要だと思ったからだ。ボランティア学生は、関西、関東の大学生。屋根の雪下ろし、交流会等でもらった元気は計り知れないほどおおきい。

大学生との会話のなかで、二月のスマトラ沖地震で大きな被害を受

けたインドの被災地に、仮設住宅建設に行くお話しを聞き、自分たちも全国の多くの方々から義援金や物資、励ましのお手紙等の支援を受け助け合いの大切さが身にしみたために、インド国の被災者のお役にぜひ立ちたいとお話したところ、文房具が良いのではと学生さんにアドバイスされ賽の神行事でのお賽銭で購入し、社会福祉協議会、市役所栃尾支所の職員にも協力いただき、私達の折った三千羽の千羽鶴も学生さんに託し、インドの被災者への支援物資としてもらった。

学生さんの帰国報告会。インド国での文房具贈呈式や学生さんの活動風景を映像で見ながらの仮設集会場での交流会には、寄せ書きに両国の国旗を描いてくださった今井さんも含め参加七十名と部屋に入りきれない程で盛り上がった。次は学生さんとともに、阪神淡路の震災地から届いたヒマワリ、コスモス等の花で住宅周辺を埋め尽くすことを計画している。

集会所での県知事との復興座談会では、知事の強い復興への決意が感じられた。棚田の復興は地下水の関係で無理でも畑作か山菜（ワラビ）畑等を考えている。長男として生まれた自分には、家を離れざるを得ない人達のためにも、彼らが生まれ育った故郷を残してやりたい気持ちが強いと言う自分の今の気持ちを申し上げた。生産性や効率も低い棚田を守る事が国土を守ることにつながると言う知事の復興への強い熱意に感謝し大いに期待したい。

この地震で部落での避難所生活と多くの地域からの人達との仮設住宅での二年間で体験した人間模様はこれからの自分の生き方の中で大いに役立つこととなるだろう。

昭和１８年生まれで戦後の配給品をもらいにいった記憶が少しあり、物不足と物の大切さだけは親から教えられてきた。このたびも全国の人たちに励まされ助けられたことは忘れてはならない。

花の中の仮設住宅という私の思いも、みんなが心と力を合わせ生活再建と復興への語りの場としながら作業をして植え続けたヒマワリだけでも三千本を超えて、かなえることが出来たと思う。

これからも花を植え続け、晴れた日は花の手入れを全員参加の語りの場とすれば、この作業は孤独からの仲間作りの場ともなるのだろうと期待しているところです。住民の皆さんが自分の人生で忘れることの出来ないであろう仮設住宅生活の思い出として頂きたいから。

また皆さんの、仮設住宅を離れての再出発に合わせて、コスモスの種１キログラムを三百メートル道路の両側に蒔いて、皆さんとの惜別の際のコスモスロードとしてもらいたく思い、七月三十日に区民の皆様の協力を得て実行いたしました。

皆さんバラバラになりますが、いつかまた顔をそろえて思い出話と近況報告会がしたいね。

苦しくとも楽しい時もあったね。それが思い出だから、体を大切にしてください。

私の家は高台に有り敷地が傾き地割れが何本も建物の中に入り一階部分の柱が開き、しきり桁差しが抜け玄関は十センチ程本屋から外れた。

地震の教訓

千野陽子

平成１６年１０月２３日　晴

この日は、西谷小学校の例年の事業でふれあい祭の日。朝からお天気も良く西谷小学校児童の作品展、西谷保育所、地域の皆さんの作品を見て楽しみ、そして校長先生のお知り合いで糸魚川からおいでの伊野さんファミリーの演奏が聞ける日でした。

お父さんがフルート、中学生と小学生の二人の娘さんがヴァイオリン。三人での素晴らしい演奏、私の大好きなポッケリーニのメヌエットが聞けて大満足。そして昼食には、出席者全員に、学校田で収穫したもち米で作った赤飯と豚汁がふるまわれ、皆さん楽しんだ一日でした。

帰宅後一休みして夕食の準備をしていたその時、５時５６分、一瞬地震と思いながら、そのあまりもの強さに立っていられず、柱にしっかりつかまっているのがやっと。そのうち、仏様の花壇が倒れて水びたし。それを始末して、外へ出ないうちに二回目の揺れが来て、外へ出たら部落中の人が、安全な所へとセンター前等へ集まっている。寒い晩で、８人乗りの車に１０人、５人乗りに６人とひしめき合って、一睡もせずに夜が明けた。

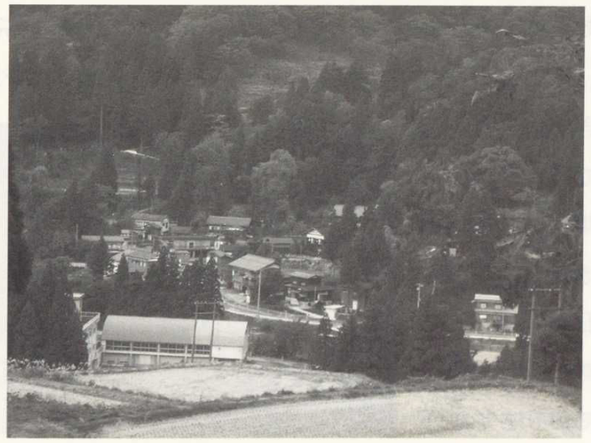
２４日も快晴で助かった。その朝部落中のお墓が倒れているとの知らせにびっくり。昨夜の食事もこの日の朝食も部落の若い人達の心遣いで炊き出しを御馳走になる。

朝、家の中を見て僅かの間にこれ程家の中を痛めつける地震の怖さに、ただ茫然とするだけ。いま地震から２回目の冬を過ごしながらこれを書いていて、あの時の全国各地からの励ましやお見舞いに、改めて感謝し、心打たれ、このときいただいた気持ちが他に変えがたい今日までの力になった事と思っています。

そして家族、親戚、地域の絆の強さの有難さです。この地震により部落の数軒が外へ出て行かれ、そして何十年も豪雪に耐えた住まいが壊され更地になった淋しさです。土蔵は地震にはあまりにも弱く、昔の人が丹精込めて作った建物が何件も取り壊された事です。昭和20年の長岡空襲の時、土蔵の中へ酒樽３４本に水を入れておいたら、周囲が焼け野原になったけど１０日から、２週間経って土蔵を開けたら、中はまったくそのままだったというのを見てびっくりしたと言う事を思い出しています。１１月８日の余震が無ければまだ良かったのですが、あれでまたすごい痛みをこうむりました。

昨年の夏、家の中と周囲を大工、土建業の業者から修理してもらい１１０年前に建てられたこの家へ住み続けられる事を喜んでいます。そしてこれを修理するには莫大もない費用がかかったわけですが、建物共済等良い制度がある事に、皆さんあらためて安心したことと思います。田圃も国、県の力でが出来、収穫できた格別の喜びです。

この地震の体験から、今まで以上に災害の備えと忍耐精神を、子孫に伝えて行く事を普段の生活から教えてゆく大切さをしみじみ感じています。



私の人生

多田　利

半蔵金に生まれて75年、嫁いで50年。土がしみこんだ生活のなか、平成元年２月に嫁ぎ先の父が90歳で、３月には頼りの夫が62歳で此の世を去りました。

その後、義理の母と二人暮らしで、平成10年に義母92歳でなくなりました。その時私は70歳、子供は３人の男の子。３人とも市外で暮らしています。

田は８反くらいあって、村の人に委託し年貢をもらい生活していました。働ける内は先祖を守って、半蔵金で暮らすつもりで、頑張っていた折、10月23日午後５時56分、「中越大震災」一瞬の出来事、ガタガタ、ガシャン、ミシミシ、バタン、立つことも、外に出ることもならず、揺れる家の中で音だけ聞いて、あとは神頼みでした。

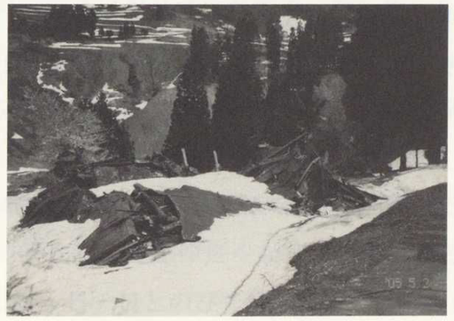
隣の人の声でようやく外に出て、隣の夫婦と三人で道が割れたり、崩れたした所を西谷川沿いの家の所まで行き、８人となり、そこからは道も落ち、崖も崩れていて村のセンターまでいけず、畑の中で５時間くらい余震に震えながら、シート等にくるまって、寒さに震えておりました。

近所の男の人がやっと下まで行き、栃尾に電話をして下さって、まもなくレスキュー隊のひとが来て下さって、年寄り二人をおぶってロープで下り、それをつたって皆が崖を下り、道の端を通りセンターの避難所に着き、ローソクの明かりで皆さんに会いました。明るくなり弁当を分けて貰って朝を迎えました。次にやまびこルームに移り40日くらい、食事は町のお弁当屋さんから朝夕２回持ってきて貰って、助けていただきました。生活は村中で助けあって無事に過し、１１月２７日と２８日に荷頃の仮設に入りました。なれない仮設生活も大変でしたが、市の方、区長さん、集会所の世話をしてくださった方々のお陰で暮らしております。

地震後の冬は大雪となり、半蔵金の私の家も地震で全壊となっていたのが１月１１日の朝、雪でつぶれたと聞かされました。大雪のため行ってみる事もならず、４月１７日に子供たちが帰ってきたので、一緒にかんじきを持って見に行きました。柱が４本頭を出して、後は全部ぺしゃんこになって、上にはまだ雪が１ｍ５０ｃｍ位あったでしょうか。家のつぶれるときの気持ちを思うと涙がこみ上げました。雪がなくなったら業者から片付けて貰う様頼んであるのですが、大型車が通れないので何時になる事やら分かりません。

７６歳の一人暮らしにはどうすれば良いのか不安でいっぱいです。公営住宅に一人暮らしでは金もかかると思うし、末は長男に見てもらうことになるのですから、今長男の家を少し増築して自分の部屋を作り、孫達と仲良く一緒に住む道を考えています。

昭和５年生まれで、戦時中を乗り越えた老人である私は、ガマン、シンボウ、和を考え、やすらぎも忘れずに、人との付き合いも大切にして、良きバーちゃんになりたいと思っております。つぶれた家は、昔の思い出がいっぱいありますので、綺麗に片付けなければと考えると涙が出ます。私の人生、この先何年かは、誰にも分かりませんが、寿命のある間はしっかりと頑張って生きたいと考えております。今後のご支援をよろしくお願い申し上げます。



家は潰れても、山は崩れても、
春はきっと来る。
庭の桜もきれいに咲きました。

私と家と災難と

内山正子

北荷頃仮設住宅に仮住まいも半年が過ぎました。
ようやく春が来ました。県内外から寄せられた、心温まるご支援また救援物資、厚い真心に支えられて被災者は、ようやく立ち上がりました。

家の修理も済ませて、自宅に帰る人達、また子供さんの所に身を寄せる人達、これから出来る復興住宅に入居を待つ人達、新築される御家族、それぞれ、ゆめと、希望をもって毎日を生きていると思います。

私も、７．13水害と10．23中越地震のWパンチにあって言いつくせない気持ちで、いっぱいであります。しかし、未来に向けて気持ちも新たにしております。

茶の間に水が入り、床の間がくずれて、生活をしておりました。そして地震・・・

丁度新聞配達をしておりました。早朝に起きて新聞配達にいく・・・「おりなす」の駐車場、そして吉水の皆楽荘に自主避難、あるいは友達の家に泊めてもらっての日々の生活でした。冬に入り寒くなり友達や知り合いが来て、危険すぎるから家から出なさいと忠告してくださる・・、何度も足を運んでくれました・・・

でも正直のところ家から離れるのは嫌でした。そのうちに幾日か過ぎての昼間の地震、11月8日です。たしか長岡市内に居ました。車が揺れる・・・、もしや家が・・・。

やはり、玄関を入るともう大変でした。壁が建物からくずれ落ちて、すべて倒れており足の踏み場もありませんでした。

自分自身の気持ちも決まり、現在の仮設住宅に引っ越して参りました。朝日が入り、風通しも良い部屋で、喜んでおります。２年間の約束ですが、その後も良い住宅に入居出来る事を願っております。

皆様にも幸多かれと、そして平和な日々が来ます様に日々お祈りをして過ごしております。

平成１７年　６月１２日

仮設に入所して１年楽しかった

梅沢充子

寒さも日一日と深くなって来ました。仮設の多くの人達は稲刈り、畑などで地域の自宅に通っている季節です。地震災害からもう一年になろうとしています。仮設に来た時に知り合った人達は半蔵金、栗山沢、田代等の人達でした。言葉も良く分からない、知らない顔の人達ばかりで、友達になれそうもなかった私は、主人と二人で話も無く落込むばかりで、食事も満足でなく夜は眠れませんでした。買い物に行くには雨の日など、歩きで一日かかります。身体は細くなるばかりです。仮設住宅での日常はとても不便だと思いました。

三ヶ月位過ぎた頃には仲間入りも出来、話も弾んで楽しい日々になりました。買い物に行くときは車に乗せて頂き本当に助かりました。皆さんと雪降ろし、集会所でのお茶飲み等で、だんだんと仲良くなり気持ちもほぐれ笑顔が出るようになりました。田舎の人たちは気持も心も素直です。面倒を良く見てくれます。畑仕事も仲間入りして始めて土やクワ等をいじり、畑に枝豆を作りました。よく出来ると良いなぁー。どうなるか楽しみです。去る七月十二日自転車で転び、大腿骨の骨折で中央病院に入院しました。仮設の人達が心配して主人を社会福祉事務所へ連絡して下さり、面倒を見ていただきました。他の仮設の人達の中には、心配して頂き見舞に来てくれた人もありました。退院してからも大丈夫、大丈夫と心配してくれました。足が悪く歩けないので、住民の方に車に乗せていただき、買い物や病院、色々の事で大変お世話になりました。感謝しています。

夏は盆踊り、焼きそば、シュウマイなどの店、餅つき大会などでにぎやかでした。

私は古い家ですが一戸建の家を買い求めました。足の怪我もありますが、仮設の人達と仲良くなり、引越しするのがいやになりました。引越しが一日一日とのびて行きます。畑の枝豆は良く実り始めました。

先日試食しましたら美味しかったです。自分にしては良くできたと思いました。皆さんにも食べていただきます。寒くなるばかりです。皆さん身体にはくれぐれも気をつけてください。私は引越しをしても仮設に遊びに来ますので、そのときはよろしくお願い致します。私の家にも遊びに来て下さい。待っています。色々とありましたが、本当に楽しかったです。とても仮の住まいでの毎日とは考えられません。こんな体験をして、最後は楽しく心を弾ませて引越しすることが出来ました。本当にありがとう御座いました。

人は一人で生きているのではない。

飯　塚

単なる揺れだと思った。すぐに止まると思った。長い長い縦揺れと大きな横揺れは、生まれて始めて味わう体験だった。

ゴトゴト動き、パタパタする冷蔵庫のドアを思わず押さえた子供に、「危ない！よけて！」と、大声で怒鳴るしかなく、すぐに治まるだろうと、子供が呑気に構えているのが見て取れて、下敷きになったらどうやって助けられるのかと、最悪のことばかりが頭に浮かんだ。

ジェットコースターや地震体験施設などと違い、一歩間違えれば危険につながる行為をしてはいけない。どういう行動を取ったら最善なのかと、突然の激震と動揺の中で困惑していた。学校での訓練を忠実に守り、テーブルの下にすばやくもぐった２人の子供たちは、食器棚と重い器の落下から身を守っていた。

阪神大震災が頭に浮かんだ。落下物を避けて、歩けるスペースがあったことを感謝しなくてはいけない。雪国の丈夫な家が地盤沈下、道路陥没から全員を救ってくれた。地響を伴う揺れの中、地域の人たちの無事な顔に出会ったとき、安堵の思いが横切った。共に地震に遭った多勢の人たちの助け合いが、地震後の私たち被災者を救ったのです。半蔵金の人間でよかった。つくづくそう思います。こういう時、村の人達の団結力が試されるのだと思いました。何をするにも村全体でする山あいの人のつながりを尊重する田舎生活が、地震後の避難生活を助け、一ヶ月以上の共同生活を可能にしたのだと思います。

山は、幼年期、壮年期、老年期とあって、何十万年単位で姿を変えている。地球の年齢を考えると、百年に一度の大地震はわれわれ人間には考えもつかない出来事なのだが、地球にとってはどういうことなのだろう。地球の地形は、こういうことの繰り返しで、姿を変えていくのだろうか。地球のもつエネルギーに対して、どういう表現をして良いか分からないほどの衝撃を感じました。

今日も、日本のどこかで、地震情報が流れています。震度３、とテレビで見るたびに、「良かった」としみじみ思います。震度３、４くらいならば「びっくりした」くらいで済むでしょうから。

後の心配は、南海地震が起こるか否か。願わくば、災いというものは最小限であって欲しい。地震国に生まれ、中越地震を体験した人間として、起こりうるであろう事態に負けない力を、日本中の人たちが持って欲しい。

地震なんて「他人事」だった私たちは、突然の不幸にマイナス面だけを考えがちですが、全国の皆様の暖かい思いやりをたくさんいただきました。

法律も次第に変わっている様子で義援金などもたくさんいただきました。今度は自分が人を助けたい。そう思える大切な気持ちをもてた人が多いと思います。

「人は一人で生きているのではない」そう感じた地震でした。地域の皆様、全国の皆様に、これからもずっと仲良くお付き合いをお願いいたしたいと思います。

生まれて初めての思い

平　沢　ソ　カ

私の家では地震の時、飯台に座っていたときでした。突然の揺れで何も考える暇も無く、手の付けられない有様になり、足の踏み場も無いほどになり、どうすればよいかと思っているとき、よその人たちは外に出てこられて学校のほうに避難していかれました。

この年齢まで生きて、こんな怖い思いをしたことは初めてで、私たちも避難するため橋を渡って中ほどに行ったとき、ひどい揺れに遭い橋が落ちるのではないかと足のすくむ思いがしました。ようやくセンターまで避難したのは良かったのですが、地震の夜はひどく寒い夜でした。凍えるほど寒く、もうどうなっても良いから家まで帰って、なにか着る物を持ってこなければと思い家に入ったとたん大きな揺れが続けざまに二度ほど起こり、立っていられない揺れでした。なんとか「袖なし」を見つけて外に出て、ようやくみなさんの居られるところまで避難ができました。親切な人が居て、車の中に入れてもらい、一晩車の中に避難していました。一晩の内に、何回余震が起きたことか。皆さんも怖い思いをしていられた事と思います。

私たちは、学校に避難させてもらいました。一ヶ月あまりも毎日炊き出しを届けていただき、食べ物には不自由しないですみ、本当に助かりました。

そのほか、色々と物を届けてもらって本当に助かりました。皆さんの親切が身にしみて、ありがたく思っています。私も何か恩返しが出来ればよいのですが、皆さんに世話になるばかりで申し訳なく思っています。八十三歳にもなって、皆さんの親切が身にしみて嬉しいです。年ばかりとって皆さんの世話になるばかりでごめんなさいね。

忘れられない地震

鈴木　美保子

「ドドーン」とひびく轟音と共に、体が浮き上がる感じがした。そのうちものすごい横揺れ「わぁ、地震だ」急いで外に飛び出した。外に出て家を見た。まるで模型で出来た家の様に左右に揺れ今にも壊れそうだった。近くの山では、「ブスブス」「ゴォウゴォウ」と山が崩れる音、杉の根っこが裂ける音、暗闇の中での不気味な音。

生きた心地はしなかった。もうどうなるのかとも思った。一瞬のうちに地震が村を襲った、十月二十三日のあの日の事は忘れることは出来ない。生まれ育って住み慣れた小さな村は私にとっては、自慢できる半蔵金だった。どれほど夢であって欲しいと思ったことか・・・。

二日後、昔の小学校の建物での避難生活が始まった。余震も毎日頻繁に来て、本当に恐ろしかった。電気も数日来なかった。電話が出来なかったのが悲しかった。せめて子供たちに無事でいることを知らせたかった。数日過ぎてから、家は大規模半壊と診断された。半蔵金での生活はもうあきらめるしかないと思った。それでも棚田のある古里へは帰りたい気持ちだった。私よりも夫の方が、村を出るのには心残りだったと思った。長年頑張ってきた田畑も用水路も谷底に滑り落ち、まるで地獄を見るほどに変わり果てた。十一月二十七日、避難生活から仮設住宅生活へと新たな生活がスタートした。仮設のほかの住民たちにも慣れた十二月三十日には年越しのイベントがあり「復興そば」をご馳走になり、ありがたいことと思いました。また一月からの大雪には大変でした。せめて雪には負けまいと、十回以上も雪堀りに半蔵金の家まで通ったが春になってみると、地震と大雪により、家の傷みが激しく全壊ほどになってしまっていた。

半蔵金での生活の望みは消えた。

今では復興住宅に入居出来る事に望みをかけ、これから先の人生を過ごせたらいいと思っています。

半蔵金区　区長　椛沢　善一郎

小学校の時、社会科の教科書で天地創造のことを習いました。つまり地球誕生の話の事です。

「地震が起きて水の星だった海の中から突起した山が火山となり噴火を繰り返した後、熱によって吹き上げられた蒸気が大気を作り冷えた時期に雨となりその繰り返しで陸地が出来た。」

その説明がほんの数ページだったので、あたかも自分の一生のうちに地球が出来上がってしまったような錯覚に陥ってしまった子供のころを思い出しました。

あの忌まわしい日以来、早くも二年の時が過ぎ、まさに天地創造の時代の１ページだったかもしれない日に我々は遭遇してしまったのでしょうか。私達の村のシンボルであった、樹齢七、八百年といわれた半蔵金の鎮守様の大杉の命も地球的時間から見れば、瞬きひとつの間のうちにも入らない短かさかと思います。

私達の地域は今、国を挙げて復旧の手を差し伸べてもらっております。

しかし所詮同じ人間同士のやることですので個人的には不満は残るかもしれません。それならば自分が晴らして世の中のためにどれだけ貢献してきたか、しっかり反省してみる必要な機会を与えられたのかもしれません。今回の災害では日々の営みの中でそれぞれの人間模様をはっきりと描いてくれました。そんな中で非現実的で無力な自分が地域のリーダーになろうとは、一切誰が一番の被害者なのか自分を含めてこれまた謙虚に反省をしてみる必要があるのではないでしょうか。

いずれにしても地震の被害区域の中に運悪くして入っていられた皆さん、そして特に仮設住宅での不便な生活を余儀なくされた方々には大変ご苦労様でした。早くも契約期限が迫ってまいりました。皆さんのご難儀は陰に陽に噂話で伝わって居りました。皆さんのご苦労は、ふとしたことで何気なく漏らした一言でも、当のご本人よりももっと真実をついた話となって耳に痛く感じて居りましたが、全体の流れは一人や二人の力ではどうなるものでもなく、それが天災と言うものであると率直に認めそれぞれが明日からの生活、そしてこれからの人生に貴重な体験として生かしていただけますように祈っております。度そしてこれからも皆様方の頑張りに期待をしております。今回、仮設住宅解散記念誌発刊にあたって、はからずも寄稿させていただくことになりました。甚だ駄文で恐縮ですが私なりの思いのままを書かせてもらいました。

西中野俣区　区長　金　内　忠　司

災害から２年近くになりますが、地域ではいまだに幹線道路の復旧作業が続き、山に入れば手がつけられないほどの状況が残されています。仮設住宅の皆さんも、まだまだ安心できる状況にはないことと思い、ご苦労がしのばれます。

その後、村に残っている私達も家の修復はもちろんの事、道路や農地の復旧などの終わるめどが立たない状況ではありますが、それでも何とか我が家に、そして村に元気を取り戻そうと一致団結して取り組んでおります。ようやく現在は作物が実り、野菜を味わう喜びをかみしめることができるようになりました。

村の中心である中野俣小学校の校舎も１棟取り壊しとなり、存続が心配された時期もありましたが、今は子供たちの元気な声が聞こえています。村に子供の遊ぶ声が聞こえなくなった災害時と比較して、学校があることの喜びをみんなで再確認している今日この頃です。取り壊した校舎の跡地も先生方と地域の皆さんで整備する計画も進行中です。

また、この地の財産である杜々の森を生かした観光、地域の心を伝える伝統芸能である広大時など、災害復興事業以外の活動にもようやく取り掛かれるようになって参りました。８月には杜々の森で２年間中止していた名水茶会も実施されることになりました。

村の高齢者もまだまだがんばらなければと思っています。そして仮設住宅の皆さんが一人でも多く村に帰って、一緒に祭りができるようになることを願っています。

大きな災害に見舞われましたが、立ち直る力をくれたこの地と復興に力をかして下さった皆さんに感謝をしまして、この地を守り伝えていきたいものです。

地震とこれから

松尾区　区長　広　田　嘉　夫

地震で被害を受けた地域の各地に見られる光景だが、松尾でも業者が朝早くから暗くなるまで、田んぼ・地滑り・水路の復旧工事に取り組んでいる。市外県外から通っている会社も多い。松尾で最大の被害が発生した、四次工事現場だけでも20台近い重機がうなりをあげ、日に日に地形の様子を変えていく。まさに壮観である。

昭和40年代38戸の村も世の流れに逆らえず、離村が相次ぎ地震前の19戸からまた4戸が村を離れた。自宅が全壊や大規模半壊の被害を受けたことが要因であるが、いずれ来ると思われる村の状況が10年早まった感がする。しかし、今こうして復旧工事を見ていると、この過疎の小さな村にも、これだけの巨額な復旧費用を投じていただける行政に対して本当に有り難いと感じている。

松尾は標高が高いため、主たる用水を約4キロ奥の来伝川から引いている。山あいの険しい地形に堰がへばりつくように掘り込まれ、条件の悪さに県の役人がたまげたと昔言われたほどの水路である。しかし、この水路は田んぼ以外にも飲み水などにも影響を与え、村の生命線と位置づけられ、先人たちが鍬や鎌で必死の思いで守ってきた水路である。水害で大きな被害を受け、地震で壊滅、復旧不能となった。

行政はポンプによる用水の確保に手続きを進めてくれている。水利組合としてもこれに異を唱えることは出来ないが、今後の維持管理の面で悩みは尽きない。

今年は、村全体で去年よりいくらか多く植えられたが、田んぼの7割近い約10町歩が作付け不能となった。2年続けて飯米のない家も数戸ある。水が無いためである。

地震後の12月、前任の区長に頼まれ村のほとんどの田・水路・農道等に信越測量を案内した。そしてその被害を再確認したとき、高齢者が半数近く、子供も跡継ぎもいない村はどうなるのか・・・・さまざまな思いが駆け巡った。

地震で全壊になった家、見物に区外から来た「まつおの大のげ」大半が世話になった。市民会館での避難生活（短期間のためか特にストレスやトラブルもなかった。貴重な体験となった。）　仮設住宅にも松尾からは2戸が入居した。

17年4月から区の当番になった。昨年、毎日のように工事関係者で業者・役所・区民と連絡等で奔走した。被災地の区長みな同じだ。

今年も農道除雪から始まり、復興基金の対応、業者・役所との対応、地区のために自分なりに取り組んでいる。

今、さかんに担い手、集落営農、法人化など行政やJAとの会合の中で出てくるが、どのような形でこの地で生活していくのか自分にもよくわからない。

復旧は工事の終わりでなく、人々がいくらかでも此の住みなれた地にこれからも暮らして以降と再確認したときがそのスタートではないだろうか。

比礼区　区長　渡　辺　政　義

「どうだいみんな大丈夫だかい？危ないようだったら、一緒に集落センターに避難していた方がいい。」

自衛消防団員として、我が家の損壊を顧みず、地震の起きた夜も次の夜も毎晩、村中全戸に声をかけてくれた方々には本当にお礼を言いたいです。

そんな思いやりのある若者たちにも地震は無情です。容赦ない幾度の余震の連続に、日がたつにつれ村の被害も大きくなり、ついには比礼から三軒の世帯が仮設住宅に移ることになりました。お宮の裏の家の三つの明かりが消えて寂しくなりました。

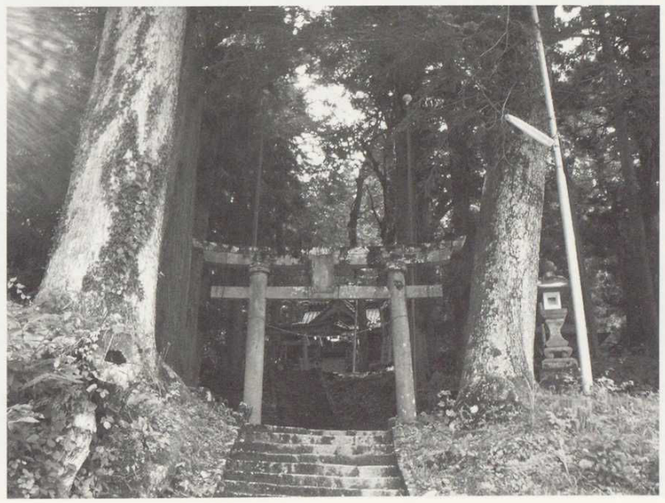
五十年前までの石油で栄えた頃は百軒近くあった家も、今は三十一軒。

「比礼の姿をもう一度取り戻したい。」

そんな思いを持った若い人達が、いくつかの企業誘地に真剣に取り組んでくれました。競輪の場外車券売り場の誘地の時には村中の人達で、同じくらい規模での場外売り場が地域の発展に貢献している福島へと見学に行ってきました。他にも数社の企業に地元に根を下ろしてもらいました。

お陰様で、比礼の集落は今、経済的には大変助かっております。その時、一緒に企業誘致に協力して行動してくださった方々の中でも、地震によって家が壊れ仮設に行くことになってしまった方々に村として何もして上げられないことを心苦しく思っております。

いつの日か、出られた方も地元に戻り、この地から栃尾の霊峰である守門山をまた一緒に眺めることができたらと思っております。



中越大地震からの復興と活性化への道

中区　区長　千　野　威　徳

過疎化の激しい山間地を狙い撃ちしたかのような地震でありました。人口密度の低い山間地のためか、人的被害は少なかったけれども、山古志地域に代表されるように山間地特有の被害が発生しました。栃尾地区においても被害は山間地域に集中して発生していました。

中地区でも、高齢者によって守られている農地が多く、まして棚田が多いこと、また、被害が甚大となったことから、その復旧費用も高額になり、農家自身の負担金も高くなることから、作業効率の悪い農地の復旧を取りやめて放棄してしまう農家が多く見られるのが現状であります。

そうした中で、国の農政が「地域の担い手の育成だ、集落営農だ」と号令をかけても、作業効率の悪い山間地において進展しないのが現状かなと思われます。

しかしながら、地震によって部落を去る人、また高齢者世帯が増加の一途をたどるという現状を踏まえて、これからの集落を守り活性化していくことに向けてどんな取り組みが出来るのか、皆の知恵を終結して、昔の集落のような連帯意識を育みながら、取り組むことができていけたらと思います。

地震と、これからと

佐　藤　タ　イ

私は荷頃の中崎と言うところで１人暮らしをしていました。県道から少し坂道を上がった所で静かで好いところですよ。

中越地震のときは家で夕食の用意をしていました。鉄瓶でお湯をわかしてね。さあ食べましょう、っていうその時でしたよ。「バーン」と、いきなり大揺れ。すぐに地震だとはわかったけどもね。停電で真っ暗になるし、鉄瓶のお湯が足の指にかかってすこし火傷もするしね。「キャー」って大声を出しましたよ。私の叫び声を聞きつけて隣のお父さんがかけつけてくれてね。うちの中を懐中電灯で照らして、「どうした、大丈夫か」っていってね。「足の指を少し火傷したみたい」。「他はなんともないか。」ってね。それでそのお父さんは近所の様子を見に出て行ったんだけどね。

その後も余震は続くし、家の中は真っ暗で怖いし。どうにもならなくて家の外の道端にしゃがんでいたら、「おーい、車には入れや」って、さっきのお父さんに言ってもらってね。近くの家の子供と年寄り三人で車に避難したの。十月の半ばを過ぎてもう寒いでしょう。とてもありがたい思いをしましたよ。

それでも十時を過ぎた頃には余震も収まったようなんで家に戻ってみることにしました。怖かったけどね。そのあと、荷頃の開発センターに、村の人が集まっているから、と声をかけてもらって泊めてもらうことにしました。家から毛布と枕を持ち出して、背中に負ぶって、ろうそくの明かりを頼りに歩いて開発センターに行きました。センターは村の人でいっぱいでしたよ。それでも何とか横になる場所を見つけてもらって寝ることにしました。だけどまだ揺れは来るし、まわりは人でいっぱいだし眠れたもんじゃない。朝の五時までそうしていたけど、今度はおなかが空いて我慢できない。あの地震で、夕飯なんか忘れていたしね。開発センターでは、とても食べられそうもなかったし、それで村の中の友達を訪ねたの。

その人とは長い付き合いでね。家もたいした被害もなくて、すぐに家に上げてくれましたよ。そのまま4日間、その人にお世話になったの。もう食事からお風呂までね。ただいつまでもお世話になりっぱなしってわけにもゆかないから、傾いて、いためつけられた我が家にもどってね。避難所でもあればありがたかったけど、荷頃全体では地震の被害はたいしたこともなさそうで、荷頃には避難所はできなかったんだよね。それで壊れた家になんとか住んでたんだけど、これから冬って時期でしょ。修理するにも大金がかかるし、栃尾地域全体で家がたくさん壊されたもんだから、大工さんだっていつ来れるかわからない。困っていたら仮設住宅ができるって聞いてね。応募したら抽選だったけど運良く入れてもらえたの。本当にあり難いことでした。

それでもう一年半、仮設住宅にお世話になっているわけ。ここの暮らしはいいですよ。一緒にここで暮らす人たちもみんな地震で被害をこうむって困っている人ばっかりでね。痛みがわかるって言うのかなあ。最初の頃は知らない同士だったもんだから、なれないとこがあったけどもね。今じゃおかずまで持ってきてくれるんですよ。

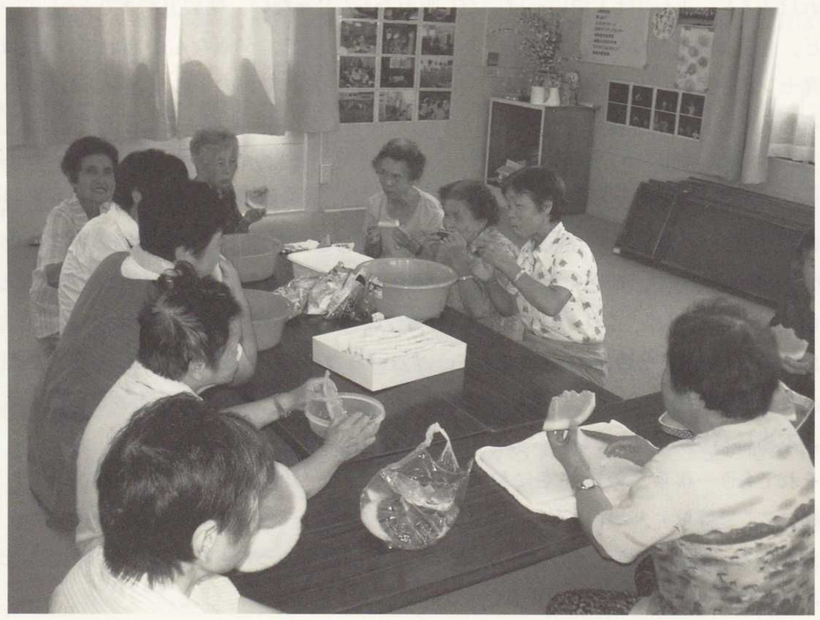
一人暮らしの年寄りにはありがたいことですよ。ほかにも集会所でお茶飲み会があったり、みんなで草取りしたり、花植えたり畑を作ったりね。いい人たちですよ。このままずっと、ここにいたいくらい。そう言っても期限もあることだしね。

だからこれからの生活がみんな大変なんですよ。住んでた家は修理にお金がかかるし、冬に困るしね。雪は多いし坂道はすべって危ないし。この年で転びでもしたら終わりでしょう。荷頃の家にいたときは雪や坂道はあたりまえだったけどね。仮設に来てみたらあんまり違っちゃって、とてもこれから戻る気にはなれないね。

長岡に息子もいるけど一緒に住む気にはなれないしね。それで復興住宅に申し込んであるんだけどね。抽選だから入れるかどうかまだわからない。だめでも栃尾に居たいんだよね。この年で知らないところなんかとても行けないよ。栃尾には知ってる人が多いし、慣れてるから安心だしね。なんたって故郷だしね。

私は「一之貝」ってところで生まれてね。五人兄弟の1番上だったの。昔のことでお金もそんなには無い家だからね。五、六年生の頃もっと勉強したくなったけど、下に四人もいるでしょう。一番下の妹なんかまだ、這っていたしね。それで卒業して、愛知県の紡績工場に働きに行ったの。この辺じゃ当たり前のことだけどね。それから家に戻って「荷頃」に嫁に来たの。それで五十数年、いろいろ苦労もしたけどね。十三年前に夫もなくなったし、もう年寄りの一人暮らしだからね。周りの人に迷惑かけずになんとか生きてゆきたいね。

（聞き取後編集）



娘夫婦と孫がよんでくれました

川　上　フ　サ

地震のときは私ねえ、ちょうど孫のとこ泊まりに行ってたの。前の日に孫の幼稚園の秋の演芸会を見に行くために行ってたの。そしたら23日の日、地震が来て、半蔵金の友達から電話が来て、「おかあさん、地震で家が大変だよ。」って言ってきたんです。

栃尾の娘の家でもあんまり揺れたから、娘と孫の3人して外へ飛び出した。寒いから毛布をかけてさ。電気も消えてしまってテレビも見ることができなくて、娘の車があったからラジオつけて聴いていたら、新潟県で長岡あたりなんていっていたからびっくりして。でも、半蔵金があんなひどい状況だとは思わなかった。怖くて家の中にいることができなかった。周りの人たちもみんな家の前に出ていました。それでもその日は家へ入って過ごしました。眠たくての。

娘の家でも電気とかは消えていてね。朝になって、水とかガスはもう普通にきていたのでご飯は炊くことができたんです。24日の朝にタクシーで急いで半蔵金へ帰り、自分の家の様子を見たらがっかりしました。遠目では道が落ちているのは分かるけど家は建っていたから、そんなに傷んでいるのも傍へ寄らなくっちゃ分からんかったの。建物から戸も全部外れてしまっていて、玄関は下の土が落ちてしまって浮いてたんです。2階や階段のところからいろんな物が落ちていて、玄関の方へも落ちてきていたし、玄関の中にあった物は全部外へ出ているような状態でした。もう見る影もなかったんです。

家は潰れそうでもないけど、前の敷地が落ちちゃって土砂が県道まで来ていた。男手がいればね、またいろいろと直していくこともできるのだろうけど。歳も歳だし大規模半壊だからもう住むことはできない。人にもう、やったっていいんだし、ほったっていいんだし。川上家を諦めて。

半蔵金に着いた時は、村のみんながセンターへ集まって、おにぎり握っていました。

半蔵金の元小学校だったところが避難所になっていたの。学校へ泊まるようになったから、一人分の敷布団に掛け布団、毛布を家から学校に運びました。半蔵金の人たちはそこに泊まった。直し直し自分の家に泊まった人もいたし。

大勢だったから小学校の教室だけじゃなくて体育館も使って寝泊りしていました。私達は食堂になっていたところに十何人で泊まって、布団一枚ずつ使っていました。

みんな気持ちはいっぱいいっぱいといった感じでした。食事は色々な人が助けてくれて、お蔭様で不自由しませんでした。朝と夜はお弁当を街のほうから持って来てくださったり、お昼は残りものでお雑炊作ったり。ご飯作る人を順番に決めて。だいたい4人だか5人でグループ作って、ご飯つくったり、後片付けしたりをしていました。夜には親類の人が何か持ってきたから食べてくれっていうのもあったし、食べもんは不自由しなかったです。私らは不安で食べられなかったとかはあんまりなくて大丈夫だった。人間くよくよしても仕方ねえ。みんな村っ子だから。

11月の27、8日頃の第一次入居で仮設住宅へ入るまで、その小学校で1ヶ月以上過

ごしたんです。第二回目の人は12月10日頃来たんだ。半蔵金から何人もここへ来るようになったから、みんなでお別れ会もしたよ、避難所になっていた学校で。

仮設入って、はじめは満足に寝ることはできなかったんです。こんなに狭いところでさ。横に寝たり起きたり。四畳半の部屋一つはやっぱり不便でした。

仮設住宅のみなさんはいい人ばっかだから仲良く、いつも助けてもらっています。この仮設に住んでいる人たちっていうのはやっぱり半蔵金の人は多くてね。半蔵金の人達は全員わかるから。最初入った時はもっといたんだけど、ぽつぽつ出る人が増えて、長岡へ出た人も、村へ帰った人もあるからさ。仮設の生活は仲良くやってるけど。みんながぽつぽつ出始めたのが寂しいことだね。人が出て行くと寂しいよ。隣がいないようになると寂しいやね。安心感がなくなるってこともあるし、隣にすぐ「母ちゃんどう？」っていったり、話もすることができないし。

半蔵金でも、隣近所や婦人会とか、そういうみんなで寄ってはいろいろと話していたよ。ここの中でもいっつも外で近所同士で話してるよ。仮設住宅の中の小さい子どもたちと話したりもね。山から来た人ばかりだから気が合うわね。半蔵金の人が寄れば半蔵金の話、栗山沢の人がいれば栗山沢の話したりさ。昔の思い出話をしていることもあるね。

仮設住宅のみんなとは週に2回、火曜と金曜にお茶飲み会っていうんだかしていてさ。お茶飲み会では、話したり、体操したり歌ったりとかして楽しく過ごしているんです。

わたしは一人暮らし。お父さん亡くなってから、今年で13回忌。それから一人で。でも周りの人たちと助け合ってっていう感じ。姉も町にいるからさ。子供達には新築してもらって。貧乏がてらにだけどさ。それがまあこの先の心配だこての。新築もいつできるか分かんねえんだ。それが心配だよね。

半蔵金の家の近くの田んぼもやめて。やっぱ半蔵金を離れるのは寂しいけど、もうしょうがねえ。年取ってまた半蔵金やりなおしても、また行ったり来たりも大変だからもう諦めて娘の傍へと考えてもらって。娘の近くだと安心。いつかは行くかなあと思っていたが、この際だから。

仮設を出たらここで話していた人たちともなかなか話せなくなる。まあ栃尾以内なら会えば喋られるけどさあ。私はねえ、本当、ぼーっと暮らしてるばっか。趣味はないし、あんまり本読むのも好きじゃねえし、字書くのも好きじゃねえし。山へでも行ってわらびだのゼンマイだの採ったり、春になればの。百姓してたときは田んぼへ入って米とったりの、それで暮らしてきたんだんね。

今でも地震とかちょこちょこ来るわね。「あ、また来た」なんて思って。ちっちゃいのは来る。テレビ見てると来たのに分からないときもある。みんなで「また今日は何時ごろ来たねえ」とかいって話したりして。

でもこんな大きい地震は初めて。新潟地震のときは田んぼや池の水が揺れで波を打つようになったけど、こんなに大きいのは人生で初めて。家がだめになるのも初めて。あんな

ことは一生のうちでもう起こらないでほしいね。やっぱり家がなくなるっていうことは衝撃だ。がっかりした。みんな燃してきたんだよ、箪笥の中の、着物とか服とか。こっちに持ってくるのに大変だと思ったからさ。今思うと、あれも燃やさなかったらなあ、ああ勿体無いなあってって思うこともあります。

これから家ができて、引っ越しするまでやっぱり不安です。いつ頃までにできるかちょっと分からないし。家ができるまでは心配だ。お金もあんまりねえし。だけども、あんまり心配ばっかしていないで元気にやらんまんさ。

（聞き取後編集）

山は残ってますよ

平沢ムツ（田代）

地震のときは、じいちゃんといつものように晩御飯を始めたときだった。ほんの二口食べたとこであの地震になった。いったい何課と思ったけど、家の中は何か倒れてきたり、上から落ちてきたり、危なくていられないんで、這うようにして外に出ましたよ。何せあの揺れじゃあ立ち上がることもできなくてね。

じいちゃんとほかの家の人と、（そういっても全部で三軒だけどさ）みんなして消防小屋に逃げ込んでね。十月も末だとこのあたりは寒いんで、なんとか居られるように修理したりストーブ持ち込んだりしてね。そこに六人で三日いたこてね。それで四日めの日ヘリコプターで長岡につれてってもらった。学校の体育館で寝ることになったんだけど、あんなに大勢の人と一緒になるのに慣れてないからねえ。

次の日、栃尾市役所の人が迎えに来てくれて、今度は皆楽荘に泊まることになった。まあそうしていて仮設住宅にはいることになった。ここは湿気が多くてね。結露って言うのか、天井から落ちてくるもんで、冬は大変だった。まわりには知ってる人も居るんだけど、じいちゃんは人前に出るのは嫌いだし、ふだん三軒の村に長くいたんだからどうしても知らない人の中に出て行くのは気が進まないね。とにかくすぐ必要なものは、仮設に運んだけどもね。なかなか慣れなかったけど、このごろは集会所にも誘われれば行けるようになったんだよ。

田代の冬は雪が多いよ。俺の知ってる限りじゃ七メートルくらい積もったのが最高だな。じいちゃん出稼ぎでいないから、俺も若かったんだね。春まで何とか頑張ったんだからね。今は重機で県道も除雪するし、村の中もブルドーザーがあるから。人が掘るのは自分の屋根と周りくらいだよ。ふだんは冬でも車で買い物なんかは不自由なくできるから。地震の後は道が壊れてだめだけどね。

それでも夏にはほとんど帰って生活してる。二人で田んぼや畑をやってさ。野菜がいっぱいできれば仮設の人にも分けてあげるし、ないものはもらったりね。

この先のことをかんがえてもしょうがないけど、まあ、不安や心配事はたくさんあるさ。あんまり気にしてばかりも居られないさ。復興住宅に入れたら冬はそこで過ごして春になったら山に戻って百姓やるさ。元気なうちはね。

（聞き取後編集）

地元に早く帰ります。

山内ヨシ

ちょっと早めにわたしの家では食事してました。うちの父ちゃん毎朝早起きなんで家では当たり前の時間なんです。もうすこしで食べ終わるってときに、なんだか「ドーン」って花火の音みたいに感じたけども、何が起こったのかまるでわからんかったけどテレビも何もあるもの全部がひっくり返ったんで、とにかく外に出た。真っ暗になっていて様子がわからないんだけど、そばにあるポンプ小屋に村のみんなで集まった。寒いんで修理して暖房器具を持ち込んで何とか三日間六人で過ごしてた。水は山からホースで引いてあるし、燃料はプロパンガスで持ち運べるから役に立ったけど。停電してるし電話も携帯も使えないんで、ほかと連絡できなくて困った。テレビ、ラジオも聞けないし。四日目に、自衛隊のバイクが来てくれて長岡に避難することになった。新潟に居る子供が来ていなくてよかった。ほんとは来るって言ってた日だったの。

高校の体育館に一晩泊めてもらったときにやっと連絡できて、その子も会いに来てくれた。お互いの無事がわかって本当に安心できた。その場所も余震があったけど次には、栃尾の皆楽荘に連れて行ってもらって、ひと月くらいはそこに居たと思う。二十畳くらいの部屋を六人で使って。風呂も入れたし、電話も普通に使える場所だったから割とみんな落ち着いていたと思う。まだ雪が降る前で応急で村に帰ることもできたんで、戻って仕事したり退屈もしなかったよ。

仮設住宅には十一月に来たんだけどもいろんな部落から人が来てるんでね。普段人の少ない村に居ると、大勢の中は落ちつかない。それで早く家を修理して村に帰ろうと思ってる。うちの父ちゃん仕事がみんな地元だからね。

（聞き取後編集）

地震にやられても栃尾さ

石丸清司

地震の時は、家にいた。6時ごろだった。まだ飯は食べてなくて、家内は夕食の準備をしていた。ストーブをつけようとしたら、「がー」っと音がした。揺れる前に「がー」っと音がした。振動よりも音が伝わるほうが早いのかね。「がーっ」と音がして、「がたー」っときて家が傾いてさ。戸がはまっていたのが、曲がっちゃった。戸の枠がはずれないで板がでちゃった。それで慌てて。冷蔵庫なんかはみんなひっくり返るし。縦も横も揺れていた。ケガはしなかったけど。夜中だったら、タンスの下敷きになっていた。「危ないから外出よう」、って家内に言って外に出た。

母屋と玄関が別のつくりになっているから、玄関が崖下の沢の方に落ちて、母屋との間に隙間が出来ていた。だから危なくて、怖くて二人で道にいた。余震がどんどんきているから中にはいられなかった。隣の独り者のお母さんが「助けてー」って。隣のお母さんは、家の中にいられないから外に出ようとしたら、玄関がとれちゃっていて、「玄関の戸をはめてくれー」って。地震で頭がこんがらがっちゃっていた。隣のお母さんと抱き合っていたら、すぐ前の道に、スーっと亀裂が入ってね、そしたらすぐ後ろの道にも亀裂が入った。

余震は何回きたかわからない。玄関の建物も余震で倒れちゃった。だから壊して燃した。

今、母屋は残っているけど下がガクガクになっている。建物そのものは直せば入れないこともないけど、屋敷が壊れたので被害としてどうしようもない。だからここにいるわけだ。役所は見積もりしてもらえっていうけど、家の修理するには雪が落ちるような屋根にしなくちゃならないから、700万か800万はかかる。そんな今になってお金かけれるか、って思ってここにいるわけだ。どうしようかって思っていたんだ。前は帰れたんだけどね。ふるさとだからさ。どのくらい住めるかわからなかったけど、今度諦めがついた。山も崩れちゃって、裸になっちゃったよ。

地震が起きてからも二晩家に泊まった。電気も通ってなかったけどね。お宮さんのそばの木が倒れるとセンターに倒れると危ないということで、それから学校避難して、地震から1ヵ月後くらいにこの仮設住宅の家に来たわけだ。1ヶ月くらいでこの仮設住宅作っちゃった。ラーメンとかどんどん物資も来た。学校にはホカホカ弁当を持ってきてくれていた。朝食べてお昼はパンなどを食べていた。半蔵金の周りはなんとか車が通う道は少しあったから車でまわってきてくれた。センターにいたときは、飯はカップラーメンみたいな麺類が多くてね。そのとき、最初、飯をもってきてくれたのは国会議員の人。それはありがたかった。政府とか東京の台東区とかが毛布とかをもってきてくれた。2枚でも3枚でも用意してくれた。何でもいただいて助かりました。

学校では教室で寝ていた。一家族ってわけではないけど、4家族くらいで。阪神淡路大震災見ていた頃は、自分にこんな災難が襲いかかるなんて思わなかったけど。

半蔵金の人で家にいられない人は、だいたい学校に来ていた。風呂は家ではいって、夕方学校に帰っていた。全員が避難してください、っていわれたから。余震も多くて、学校なんて高いからユラユラ揺れていた。でも置いてくれるところがあってよかった。栗山沢のほうの人の話しを聞くとたいへんだったって。みんなが一緒に寝転んで。半蔵金はお互いカバーして、助け合った。同じ人間だからね。

11月28日にここにきた。前後2回にわけて65家族入った。でも仮設の家に住んだ当初は頭がポーっとしてくるし、朝起きると家なのかな、って思うこともあった。このまま鬱にでもなると大変だなー、って。だから「自分で頑張らなくちゃな」って思ってた。みんなが同じに仲良くしていこうなー、って。いろいろな部落の人と会話が出来たからよかったけど。半蔵金で終わると思ったけど、こんなところに住むとは思わなかった。これからも大変だよ。

この後は復興住宅ができる。「長岡に行ってもいいですよ」って言ってる人もいるけど、栃尾に住んでる人はやっぱ栃尾だよ。

栃尾の復興住宅は街中に交通の便はいいと思うけど、今度は家賃がいる。人間生きていく分には難しいですよ。

この歳で家買ってもなあ。子どものとこだって嫌がられるから。たらいまわしにあって帰ってきた人もいたもの。昔は赤ちゃん生まれる前から一緒に姑と一緒にいたからよかったけど、今はね。どっちが悪いってわけではないけど、気が合わないこともあるわけ。長く生きてるから、その分知ってるものも多少あるわな。

地震から2年になるけど、ここにきたときは玄関に出てこれからどうしよー、なんて考えることも出来なかった。ポカーンとして。これから先どうしよう、なんて思ってたら涙が出ることもあった。ここに来て皆さんに助けてもらってよかったけど。ほんと雪も多かったし。みんな（雪堀ボランティアのIVUSAの方たち）は1回目90人くらい、2回目110人くらいできてくれたんだね。そのときの写真を引き伸ばしてもらって持っているよ。いい思い出にね。

（聞き取後編集）

年寄だから、この先がね

鈴木吉松

地震の時は、ばあちゃんと二人で部落の家にいましたよ。ちょうど晩飯時で箸を持ったところへ地震が「ダーッ」と来た。とにかく家の物が全部ひっくり返った。しばらくはなんともなかったけど、肩が痛くてね。翌日病院に行ったら薬だけくれて、飲んでも痛むからまた医者に行った。レントゲン撮ったら骨にひびが入ってた。痛むわけだよな。一月くらいは治らんかったよ。まあ、ばあさんがなんともなくてよかったけどね。

とにかく余震は止まらないし年寄り二人じゃ危ないんで、二日目から元小学校の建物に避難した。部落のみんなが教室と体育館に分かれてね。食事は朝晩に弁当の差し入れが毎日きたな。学校にいても余震は来るから怖かったけどね。鉄筋コンクリートだから崩れ落ちたらひとたまりもない。それでもなんとか無事で一月も学校にいたさ。

わたしは今日が誕生日で九十歳になった。年寄りの多い部落でも一番の年寄りだよ。若い時には東京に出て、本所ってとこで屋根屋をやったり、大阪じゃ鉄工所でも働いた。こっちに戻って来てからも鍛冶家をやったり屋根をふいたりいろいろやったよ。田んぼや畑もやったけどいくらも無いからそれだけじゃ食えなかったんでね。

子供は四人ある。横浜、東京、千葉といて、末っ子はアメリカにいる。前にばあさんと遊びに行ったときにはニューヨークにいて大きなレストランの店長をしとった。今じゃシアトルのタコマってとこで自分で店をやってるよ。アメリカには何回も行ってグランドキャニオンだとかナイアガラも見に行った。まあ見ておいて損は無かったな。息子もたまには帰って来るよ。外人の嫁さん連れて家族でね。

まあこの部落の人たちは勤勉でまじめだけどね。みんな年取って若いもんは何人も残っていないからこの先どうなるか。地震のあとはテレビ局がきたりするけどあれも大変だよ。雪堀やら色々仕事してるとこ撮って行くけど、なかなかテレビにゃでないんだ。それで地震のあとには、とにかく住むのに困ったわけだから、子供のところに避難したり、引っ越したり、部屋を借りて出て行った人も何人かある。仮設住宅にも二十軒以上来たと思うよ。百軒くらいあったのが半分になってしまった。なにしろ冬があるからね。家に住めないんじゃとても部落にはいられないさ。そうして子供のところに行ったひとはみんな帰って来たけどね。そりゃ帰ってくるさ。知り合いはいないし、お茶飲みするところも無い。食事もあわない。親子と言ってもケンカばかりもしていられないしね。

仮設住宅にきてみたら悪くないね。窓から山は見えるし周りに知り合いも多いしね。冬の雪の心配も駐車場くらいでみんなやってくれるし。九十歳だけど運転するんだよ。まあ、あと一，二年と思っているけども。ほかに趣味があるわけじゃないけど、なんとか退屈しないでいられるさ。夏場はたいてい家に帰って修理をしてた。地盤から狂っていたんで大変さ。それでもなんとか住めるようにはできたんだけど、今年の冬も大雪だったからね。家の周りは何軒も引っ越して行ったし。家に行く坂道が急で長いからこの歳じゃ出歩くのが大変だ。とてもこれからの冬を元の家で過ごす自信は無い。それで復興住宅に申し込んであるんだが、まだどうなるかわからない。まさかこの年寄りを追い出しやしないとは思うけどね。子供も町場にいれば来やすいだろうし、公営なら家賃も安いだろうし。買い物や病院も近くて便利だしね。

まあ、ばあさんの実家のある山古志なんかはもっと大変だろうけども。これから部落に戻って生きてくったって、畑で野菜でも作るしかできないし、それは町から通ってもできることだ。雪さえなかったらね。そのために家も修理したんだから。

雪下ろしもみんなのような若い人が手伝ってくれてありがたかったよ。うれしくなったよ。また何度でも来てくれるといいんだがな。

（聞き取後編集）

地元に戻りたいな

渡辺儀松

中越地震のときはちょうど夕食を食べていたときだった。三人で夕食を食べ始めた、まさにその時、中越地震が起こった。お湯を沸かしていたが、火を止めるまもなくひっくり返り、辺りにお湯がこぼれた。火は止まり、火事にはならずにすんだ。比礼の中では一番被害の大きなところだった。

それから、２日間を車の中で過ごした。また、いつ起こるか分からない地震の恐怖を感じていた。その後、集会所に避難し、同じように避難してきていた人たち３世帯と一緒に、身を寄せて生活した。現在住んでいる仮設住宅に来るまでは、その集会所で生活をしていた。

仮設住宅に移ってきてからも、やはり元々住んでいた家とは使い勝手も違い、色々と大変だった。仮設住宅に移ってから、様々な人たちが訪れてくれたり、色々な催し物などもあったが、やはりどこかで地震の記憶や、これからの生活への不安などで、心から楽しめることはなかった。

今は、通院をしながら田んぼを作っているが、仮設住宅を出た後どこへ行くかは、まだ決まっていない。比礼に帰りたいと思うが、それも現実的には難しそうだ。もう自分の土地へは住めそうもなく、どこへ行くにしても、空き家がなかなか見つからない。足も悪く、今年はまだ比礼の様子を見にいけていない。

終戦後、新しく出来て、ずっと住んでいた家を無残にも、地震によって奪われてしまった。しかし、できることなら、また比礼に戻って皆と一緒に同じ土地に住みたいと思っている。

災難はたいへんだよ

井田悦子

２年前に中越地震があって、そのあった瞬間は家にいたんです。ばあちゃんが退院してきた日でね。夕飯食べようと思ったとき地震が来たので、何が起きたのかと思った。ばあちゃんが丈夫な人だったから、外に引っ張り出して。土曜日で娘が家にいたので良かったよ。私一人じゃあどうしようもなかったよ。夫が亡くなって、婆ちゃんが入院して、地震が来て私一人ではどうしようもなかったけれど、娘がそばにいてくれて本当に良かったよ。

一晩中地震が来ておっかなくてねえ。余震がほんの30分か10分おきぐれえに、一晩中ガタガタガタガタ揺れておっかなくて。雨が降らなくて良かったけど、すっごく寒い日でした。隣の人と前の家の人、私達と道路にかたまって座っていました。寒くて一晩中居るには体に悪いのでみんなで村のセンターへ行きました。駐車場のとこなんて、あの日すごく寒い日だったのに、ほんのただそこにゴザを敷いて一晩そこで村の人たちで寝ていたんです。

家はもう、みんな滅茶苦茶になったんでねえ。倒れるものは倒れたし。センターから壊れた道を歩いて来て見ていくと、みんな家がこう傾いたようになってねえ。

避難していたセンターでは、年寄りの人は車庫の下の方へ、若い人たちは二階の方にいたんです。やっぱり下の方が逃げるのにいいからねえ。トイレはありましたけど、水が使えなくて困っていたよ。食事は、昼間はみんなで避難所のところでご飯を炊いて、おつゆ飲めるようにしたし。みんながそうして食べていましたよ。みんなが村の人たちばかりだから、みんなまとまってたわけだけど、やっぱり避難所生活はもうしたくねえよね。みんながパニックだけども、いろいろ初めてだったからね。いろんな仕事や、やらなきゃいけないことがあったんだしね。

10月23日よりは11月8日の余震のときが怖かった。お昼の11時頃の天気いいときだったけど、揺れがものすごかったんだよ。みんな家行って片付けをしていたんだ。山が地鳴りしたようになっての、そして、ぐらぐらぐらぐらとお昼頃から夜まで何回も揺れてたんだ。町のほうは震度4なんて言ってたけども、山の方は7くらいもあった感じだった。揺れるたびに大きい杉の木がみんな揺れるし。

震災後に村にいたときは皆さんの支援が本当にありがたかった。あんな奥のほうにまで、車でいけるところまでいって、そこから30分近く歩いて一輪車で大根や白菜とかを運んでくれたんだもの。あれは助かったよ。それに学生がボランティアで雪下ろしに来てくれたのもありがたいと思っています。去年は風邪引いて屋根に上れなかったから、自分があがれないのにやってもらって悪いなと思っていたんです。

避難所から仮設住宅に来てから、シルバー人材センターの仕事にバイクでちょこちょこと行っています。ただのんびりしていても仕方ないからね。

あと、やっぱり自分の住んだ村がいいから、栗山沢に行ってるんです。家壊したあとに野菜とか作ってね。それで去年はよく栗山沢に行ったんですけど、今年はまだ行ってないんですけど。今年は雪がたくさん降ったし、まだ寒いから雪が1メートルか2メートルくらい

まだあると思うよ。栗山沢行くと、何十年も一緒に住んでいる人がいて、腹の底からしゃべれるから、あそこ行くと頭すっきりするんだよ。まあ栗山沢離れてこっちの方に溶け込もうとは思ってるんだけども、やっぱり栗山沢の方には愛着がね。

この先は復興住宅に頼んであるがだけども、まだそれも抽選だからね。子どもに連れられて、家建てようかなあなんて思って市役所行ったけども、ぐるぐる回ったけど、やっぱりなかなか自分の気持ちが決まらず今は復興住宅に入りたいなと考えています。もし復興住宅に入れなかった場合、市営住宅に頼もうと考えていますけど、その先のことはまだねえ。不安です。

私は町の生活に飛び込めないというか。やっぱり山が、栗山沢がいいんだな。できることならば、また元通りの栗山沢で暮らしたいけど、先の見通しがねえし、子どもがもう栗山沢戻るのを嫌がってる。やっぱり冬があるとね。かといって、近所の人がいなくなったところじゃ、私とばあちゃんだけだと子どもは心配だろうし。やっぱり帰られないからね。

栗山沢行くとやっぱり気持ちが全然違うんだね、人の気持ちが。やっぱりいいなあって思うがけど。ここへいる人達もほとんど山の方の人達だから、みんなが仲良くしてるけど、やっぱりみんなが先の不安はあるんだ。

私も父ちゃんが亡くなったばっかりで頼る人もいないから、人にお世話になるにしたって、先のこと考えるにしたって自分でみんな判断しなきゃならなかった。でも自分の判断は間違ってるんじゃないかと思っって不安になって、なかなか決断できなかった。それでも家壊すことは親戚の人にアドバイスをもらって、家壊してみんな片付けて、村でも一番早く片付けることができたんです。補助金もあって助かり家を片付けられてよかったなと思います。

まだここに住んでいたいとかいう気持ちとかはない。仮設にはいたくねえの。娘のところへはいずれは行くかもわかんねえが、今のところは復興住宅に入りたいって気持ちだね。

今は自分で生きがいがある仕事を早く見つけたいけど、まだ生きがいになるような仕事に就けてねえから。そんな仕事していればもっと面白く過ごしているのかな。

もしも地震がなければ普通に生活してた。今でも地震の恐怖感はあるね。ちょっと揺れるとすぐ外へ飛び出る。避難所生活はもうしたくねえよね。

こわれた家と、いただいた幸せと

千野　美代子

私の家は栃尾の「中」という部落です。大規模半壊の被害を受けました。

その地震の日、私と主人は山形を観光し胎内の温泉に兄夫婦と二夫婦で一泊旅行に行っていました。家は高齢の父母に留守番をお願いして出かけていました。

23日の夜、温泉でお風呂から上がったらシャンデリアが揺れて、急いで夕食の席につきました。家に電話をかけましたがなかなかつながらないので長岡に住む長男のところにかけました。30分くらいでようやくつながり、状況を聞いて、その日は皆お酒を飲んでいたので次の朝早く帰ることにしました。

どの道路を通ったのかよく覚えていませんが、午前中には家にたどり着きました。家の玄関の戸1枚は外に放り出され、下駄箱は倒れていて、やっとの事で中に入りました。中の様子は泥棒が入ったなんてものじゃない。足の踏み場が無く、物が散乱していて一時放心状態でした。少しずつだけど家の中の片付けにしばらくは追われていました。まだ余震が続くので、四人が一階の部屋で枕元に長靴と懐中電灯を置いて寝ていました。

11月8日、お昼の準備をしていたらまた強い地震が来て、まわりのものにつかまりながら出口までたどり着いたら、義母がショックで立てなくなっていました。外では主人が「早く出ろ、早く出て来い。」と叫んでいましたね。

その夜から家の中は危険なので、父母は長男の家に三泊泊めてもらい、村の本家の車庫にも泊めてもらいました。高齢の両親を思い茨城の主人の妹からは、父母に来るようにと電話をもらいました。後に両親には茨城に行ってもらうことになりました。十一月十四日には、わたしと夫も本家で食事とふろの世話になりました。その夜は皆で本家の車庫で眠ることになりましたが、急に母が「生形見」をわたしにくれるから選んで欲しいと言い出し、母の腕時計をもらいました。高齢の母にとって余震の続く生活と、先行きには大きな不安があったのでしょう。

父母達は十一月十五日に茨城に出発しました。その後、私達は車庫に三泊、これでは体が持ちませんので、村にある生活改善センターの避難所に二週間近く泊まることになりました。トイレが壊れていて女性には不便でつらい毎日が続きました。

ようやく余震も収まってきたので、家の裏にある作業所で寝よう、ということになりました。とにかく朝晩の寒さ対策が必要です。厚手のカーテンを引き、ストーブを持ち込み、ふとん、毛布、枕も運び込んで眠れるようにしました。二十日間近く作業所で過ごしたように思います。何か、惨めな気持ちにおそわれると、「狭いながらも楽しい我が家」と口ずさんで、歌うことで自分を励ましていましたね。

休むわけにもいかない会社勤めの合間に家の片づけをして、忙しい日々を過ごすうちに私から主人に、どこかアパートでも借りて、と切り出しましたら、主人が「栃尾にも仮設住宅ができるから、そこに入ろう」と言いました。

そして、十二月十一日、ボランティアの方々や長男の手を借りて、ようやく仮設住宅に入

居することができました。長かった！

入居者のあいだで行われた部屋の抽選では、くじ運がよく角の部屋に入ることができました。心配していたペットのチンチラの「ミミちゃん」も、動物愛護協会のかたのおかげで、今までどおり部屋の中で飼うことが許可されました。これが仮設住宅生活の始まりでした。わたしの勤務する会社は、仮設住宅のとなりにあるのでとても便利になりました。三食仮設の自宅で食べることができます。（おかげで四kg体重は増えましたけども。）

引越しなど、忙しい中でも家には必要なものを取りに行ったり、畑も心配だったり、何かと帰ることになります。そのたびに家の変わり果てた姿をみると、涙が出てとても悲しい思いをしました。そうして春には父母も仮設住宅で共に暮らすようになり、狭いことなど不便を感じながらも、安心した毎日を過ごすことができるようになりました。

その年の十二月三十日には、栃尾市内のいろんなボランティアの人たちが、この仮設住宅集会所の前で歳末激励会を催してくれました。もちつき、焼きそば、甘酒を振舞っていただき、住民みんながよろこんでいました。有り難うございました。

震災後初めての春には、みんなの希望で畑を作ることになり、協力してくださる方々のおかげで畑も実現し、区割りをしたうえで希望者が使えることになりました。夏野菜など自分の手で作ることができ助かりました。

あっという間の一年が過ぎた昨年の十二月には、初雪がそのまま根雪になるという、雪国のこのあたりでもまれな冬となり、いきなり真冬並みのすごい雪の降り方となりました。隣の職場まで歩くのにも前が見えず、危ない状態でした。そんななか、都内から学生ボランティアが、大勢来てくれたのでした。そして住民の手に余っていた屋根の雪下ろしをやってくれたのです。聞けば学生達は費用まで負担した上で活動しているとのことでした。ありがとう、ありがとう。地震以来、涙もろくなっていたわたしは、今度はうれしくて涙が止まらないのでした。

仮設住宅のみんなでいろんな行事をやってきました。春にはバーベキュー、夏には盆踊り、暮れにはクリスマスパーティと、盛況のうちに実行できました。その時々に学生ボランティアの方々と交流会もあり、よさこい踊りや、応援団のパフォーマンスなど初めて目のあたりにするものもあり、楽しましてもらいました。

今でも、地震後の支援物資からいただいた全国のみなさまの善意には感謝しています。お見舞いの便りなどいろいろ届けていただきましたが、中には遠い宮崎県の十才の女の子が送ってくれたピンクのタオルがありました。洗髪後、そのタオルを使うたび、包装紙に書かれた励ましの言葉を思い出して「頑張るぞ」と自分を励ましています。

大勢の人たちのおかげでここまでやってくることができました。まだまだ、わたし達の復興はこれからですが、仮設住宅での生活がよい思い出になるよう頑張っていきたいと思っています。

俺は地元に残るよ

平　沢　成　美

地震の時は家にいて夕飯食べたばっかり。これから風呂へ入ろうかなって時にドシャーンときた。地震っていうと横揺れと思っていたけど、あの時の地震は、こう下からドツーンときたんだ。はじめは地震とは思わなかった。椅子に掴まっていたって、いつになってもおさまりそうにない。だから戸を開けて外へ出ました。外へ出たって、真っ暗。でも、家の中には危なくていらんねぇ。何が落ちてくるかわからないし、家が潰れるかも分からん。いきなりドシャーっと潰れるかも分からない。初めの揺れは長かった。家が潰れるかもしれないと思うと家のそばにいられなくて、家から離れたよ。

外に飛び出した時はいいが、立っていることができなかった。地面がモッカモッカして。家なんてもう、バッサバッサと凄い音がしていた。ちょっとそこまで出たら山から、ゴォーバリバリバリーって音がしたんだ。

地震が起きたあとは県道端に朝までいた。そこにみんな呆然としていたよ。朝まで余震が続いた。朝まで余震の怖さで寝らんねぇ。

総合機具置き場っていうのがあって、その中に入ってストーブ焚いていた。そこで避難していたら、バラバラバラバラー、ボキーッボキーッって、山が一気にみんな崩れるような音が聞こえてきた。暗くて見えなかったので音だけが響いていた。山の土が地震で落ちてしまった音だった。道路はみんな舗装があちらこちらで上がったり下がったりして、段差がついたところもあって車が道路に入ることができなかった。

その小屋の中には3日間いた。まだ余震が続いてるから家の中には入られなかった。最初の2日3日なんて、どういうふうに何食べれば分からなかった。とりあえず鍋でご飯を炊いてたけど、みんなが共同で食べるなんて頭がなかった。

地震が起きた直後は家のものとか、めちゃくちゃだったよ。瀬戸物も、みんなめっちゃくちゃ。水はとりあえずあったが電気やガスや電話はみんなだめ。風呂はタイルがみんな壊れて入らんねぇんだ。その家も戻ってきてから全部直したんだ。

生まれてからこんな地震は初めてだな。新潟地震があったけどもさ、あの地震の時に感じたのは横揺ればかりなんだ。池の水がグワッチャグワッチャ、グワッチャグワッチャ濁ったんだ。田んぼの水が畦を越えて出たんだもの。山は被害なかったけど新潟市の方が被害は大きかったね。

地震がきて3日間は、何の情報も入ってこなかった。3日目くらいから警察や自衛隊が入ってきてくれた。自衛隊はオートバイで2人ここへ入ってきた。そこで本部へ無線で連絡してくれて、長岡へ避難するためにヘリがきた。ヘリコプターは初めてで、おいらの乗ったヘリコプターは10人くらいの小さいやつでした。東村山から、ここの別荘に来ていた人も一緒に避難しました。大変だよ。帰れねぇんだもん。上越新幹線が止まっているしさ。

ヘリで長岡に避難して、明徳高校の体育館に入った。ヘリは大手高校へ降りたんだけども大手高校の体育館がいっぱいで、明徳高校の体育館へバスで移動したんだ。明徳高校

の体育館にはもう、600人か700人はいたんじゃないだろうか。あの体育館いっぱいだもの。

この日、子供からの連絡がすぐ来た。心配で迎えに来たのだけど、でも行きませんでした。こういう災害のときは村のみんなで集まってなければなんないんだ。俺は子どものところに行く、俺は親戚行くなんてバラバラにならんねぇ訳だ。わずか6人しかいないから、この部落はまとまっているんだ。泊まるところがない、食べ物がないってときは子どものところに行かねばならんけどもさ。ちゃんと支援物資もあって差し入れもしてくれるし、生きてはいられるんだから村のみんなで集まっていたんだ。

明徳高校にいた時はおにぎり一つとウーロン茶一個もらった。炊き出しが間に合わないんだよ。それから寝る前にもう一度飯が来たんだ。とりに行った時は間に合わないんだよ。とりあえず、一人一個だって。一日だけ体育館で過ごした。寒くはなかった。体育館はみんな毛布敷いてゴロ寝してた。ガヤガヤ喋ってるんだもの、寝らんねぇよ。外から電話がきたって全然聞こえねぇ。毛布を1枚敷いて、2枚掛けた。そこでは次の日から仮設の風呂を作り始めた。

明徳高校は一晩泊まっただけで、次の日の夕方、栃尾の市役所の人たちが迎えにきてくれて。明徳高校から皆楽荘へ移動させてもろうて。皆楽荘には一ヶ月いた。そこは電気も電話も大丈夫。田代じゃ風呂に3日も入れなかったからとても嬉しかった。

仮設住宅ができてから皆楽荘から移った。田代には春まで泊まらなかった。春頃になったら、ここ（田代）まで半蔵金から歩いてきたんだ。

水害の後に地震がきて大雪。地震で傾いた家に雪が積もればさ、潰れるよ。危険だから屋根の雪下ろすなって指導がくるくらいだから、いつ潰れるか分からないんだよ。半蔵金で3メートルくらいなんだもの。田代で4メートル。雪なんて、降るときは6メートルくらい降ることもあるんだから。

仮設住宅にいたのは1年間。寝泊りしてご飯食べてるくらいだ。何にもやることねぇんだもの。朝4時半頃起きて除雪。町に行ってたりはたまにはあったけども。あとはコタツにあたってテレビ見てるしかねぇんだもの。仮設の方がいいと思うときもある。人がいての。ここにいれば友達がたくさんいる。だけど、みんなが自分の家へ行きたくてどうしようもねぇ。ここへ住み着いたのは、俺の家なんて600年くらい前まで記録が残っている。俺で17代目。一生、へぇ死ぬまでここにいる。

学生のみんなに除雪を手伝ってもらった時の写真を大事にとってあるよ。その時、大学生といっぱい話して写真も撮った。もう孫みたいなもんだ。こんなに大事にしてんだ。自分の孫を可愛がるみたいにさ。

地震と家と私の思い

波形　奈美江

私は、実習の最後の日で泉苑に行っていました。そこは老人ホームでホームヘルパーの資格を取るために行っていました。ちょうど六時までだったもので帳面の整理をして帰ろうかな、と思った矢先に地震が来ました。泉苑というのは泉地区にあり、栗山沢方面になりますが被害はそれほどでもない様子だった。泉から上流にあたる吹谷とか赤谷とかは被害がひどくて、その方面から家のある繁窪に帰ろうと思ったら被害がひどくて地割れとか、がけ崩れが起きていて、もうなんとか家まで届かせてくださいと神頼みをしながら歩き、どうやって帰ったか覚えていません。

家にたどり着いてみたら、7人家族の大人が皆外出中で、小学生の孫3人だけのところへ地震に襲われたんだそうです。学校の教育というのはすごいですね。2階で遊んでいた孫たちはあわてて降りて、1階のテーブルの下に3人で入ったそうです。1番上の子は下の子を守るために必死だったそうです。

ご飯どきだったので、家から県道までの小路まで出て、おむすびにしたご飯だけは4人で食べました。そのとき見た月はとても忘れられないです。いつもにもまして透明感のある、本当にいい月でした。そうしているうちに区長さんが、村で共用している駐車場に皆避難するよう触れ回って来られました。それであちこちの道路に出ていた人たちとともに避難したわけです。この避難所で助け合いながら十日間くらいを皆で過ごしました。

その間も孫たちの小学校が壊れるほど余震が続き、息子夫婦は仕事があるし、夫も村中の見回りやら役所の人たちの対応やらで忙しく、私も避難所の皆さんの食事やその他の世話の手伝いなどで忙しい毎日でした。たびたび起こる余震に恐怖を感じながら、そうして過ごす中で11月8日のあの大きな余震が起こり、ただでさえ痛んでいた大切な家がだめになりました。敷地も地割れして家の土台もくるい、屋根といわず床といわず、もう壁も表具も崩れ落ちたり傾いたりでとても住めません。家の中の家具類も倒れるわ壊れるわで、もうめちゃくちゃ。そうして息子夫婦と孫たちは隣村の嫁の実家にお世話になることとなり、夫と私は長年住んだ家を離れたくなかったのですが、息子たちの勧めもあり他に住むところもありませんので仮設住宅にお世話になることにしました。半壊と判定された我が家は、どこを見ても思い出と大切さの詰まった、私の命と同じくらい大事な住まいでしたが暮れのうちに取り壊すことになりました。解体の前には夫の兄弟にも集まってもらい、皆で自分たちを育んでくれた家とお別れをしました。言葉にできないくらいつらいことでした。

仮設住宅での生活が始まると、日常に慣れるのも他の地域から入居された知らない人たちと言葉をかわすのも大変でした。先行きの不安も大きいし冬も迎えていましたしね。

中には高齢者も大勢いましたので日を決めて集会所でのお茶飲み会も始まりましたしゴミステーションの清掃当番や除雪作業も、住民の力でできることは協力してみなでやりました。他に大勢人もおられましたが、お茶飲み会のお世話役にも参加させてもらいました。慣れないことでお役にも立たなかったことと思いますが、今年の三月まで勤めさせていただきま

した。最初のころは家庭内で息子と意見が違ったりしたこともあり、体調を崩してしまったりしましたが、知り合いの保健士の方や周りの人たちに助けられて、今は元気になりました。

今年の春を迎えるころまでには家の新築計画も決まり、前から続けていた仕事も増えてありがたく思っています。時間を見つけて繁窪の畑を耕しに帰ったり、団地内の共同作業に加わったりして毎日を過ごしています。故郷はとても忘れることはできませんが、新しい生活のほうに頭を切り替えていこうと思っています。仮設住宅団地内の人たちは住んでいた地域は違うところの人たちですが、同じ地震の被害者ということでまとまり、夏祭りや花植えをはじめ、さまざまの行事をともに経験しました。とてもよい思い出になりました。

そういうイベント活動に参加していただいた、地域のボランティアや他県の学生ボランティアの方々と、言葉をかわしながら共同作業をして汗を流したことはすばらしい時間でしたし、交流会での会話やパフォーマンスを披露していただいたことは、被災者であることを忘れさせてくれる楽しい時間でした。本当に感謝しています。そんなふれあいの中で、私たち皆で震災一年のメモリアルとして折った千羽鶴を津波で大きな被害を受けたインドの方たちに届けていただいたことは大きな喜びでした。少しは支援していただいた方々にお返しできたかなと思っています。

今年の晩秋には新居に転居できるかと思っています。ともに二年間を過ごした皆様がそれぞれの未来に向かってがんばっていただきたいと願っております。

この年になってね　千野英夫さん・ミイさんご夫妻（93歳、84歳）

—2年前の地震のときはどこにいましたか？
家にいました。あの日はお父さんとお母さんは、家の仕事もひと段落着いたので、小さい旅行に行ってこようという事で、一泊旅行に行って私らだけでした。そのときはいつもより早いようだけど夕食を食べようとして、あの時はちょうど夕飯の終わったときでした。おじいさんは早く終わって別の部屋にいたし、私はまだ飯台のところにいました。
そのうちに、「どっつーん、どっつーん」と花火みたいな音がして、そして、ゆらゆら・・ゆらゆらと。私の家の柱は太いほうだけどすごく揺れました。家にいたらつぶされるって事で、「外へ出れ!出れ!」と言われたけど・・・。じいちゃんは先に飛び出して、「早く外へ出れ!出れ!」と言われたけど腰が立たない。あれが腰が抜けたっていうもんだかと思う。下駄箱が倒れて玄関からは出られない。別の出口には入れておいた農作業の道具やビールの空きケースがあって、どうやって出たかはわからんくらい、どうやらこうやら出ました。
旅行に行った2人はどうしているのか・・・行き先もわからんし・・・。電話も通じない。まあすごい揺れでね。普通、地震と言えば横揺れでと思っていたのに、横揺れでなく縦揺れでした。縦に「がっつん、がっつん」揺れてから横揺れになった。すごい「ドーンという音がしてね。」縦揺れは初めて経験した。茶箪笥、食器棚はみんなひっくり返るし。足の踏み場もなく、「出れ!出れ!」と言われて何とか出ました。
揺れが終わっても家には入れない。隣の嫁さんが「おばあちゃん、下に人が避難してるから」と迎えに来てくれた。そして隣のお母さんが連れて行ってくれました。お父さんの本家の前あたりに近所の人は避難していました。

—避難所は？
家は山の上だけど、避難所は山の下のじいちゃんの実家の庭にシートや大きい車を持ってきて。

—トイレとか不便でしょう？
女の人たちは使えるトイレがなく不便でした。でも有り難いことに、私とじいちゃんは、お母さんの実家に連れて行ってもらって泊めてもらいました。長い間ご厄介になっても申し訳ないし、娘が茨城にいるもんで、娘のところに去年の春まで行ってました。
孫は男2人で。長岡に世帯を持っていて、そこにも二晩泊めてもらいました。ありがたかった・・。

—仮設に移ってから最初不安や不便さはありましたか？
仮設住宅はもっと不自由なものかと思っていたら、来てみたら案外広い部屋貸してもらえたし、お母さんから上げ膳据え膳でご飯を食べさせてもらっているから、ほんに有り難いです。不便なんていっこ感じません。

—思ったより生活しやすかったんですね。ここでの生活の中で楽しかったことは何ですか？
そんなことは通り抜けたというか、・・・感じません。（お父さん）
そんなことは頭に浮かんできません。山の中の生活で人付き合いが下手だから。近所は若い人が多いから話が合わない。私たちは年寄りだからね。80、90なんて人はあんまりいない。

—実際話してみるとそうでもないんでしょうけどね。
山育ちで人付き合いが下手だから・・・。

—楽しみとかは浮かんでこない。生活するだけという感覚ですかね？
まあ今はそうですね。せがれが一泊で温泉に連れて行ってくれるのが、そんなことが楽しみです。

—学生がボランティアで雪下ろしに来たり、ほかの地域の人が来ることについてはどう思っていますか？
ありがたいと思っています。あの大雪をなんとかしてくれてありがたいと思っています。ほんとにお前さんたちが来てくれて・・。私たちは何にもしないで家の中にいるんだけど、あー雪が積もってどうしようかなーと思ってた。大勢の力でありがたい。ほんとに何よりありがたいです。

—僕たちは居られるのは、たかが2、3日。住んでいる人たちはあの状態が一冬、2、3ヶ月続くというので、かなり雪下ろしは重労働だと思うんですが、仮設で苦労したことは？
ここでの苦労はありません。家にいたときは私も雪掘りをしていましたけど、仮設では何もしなくて良くてありがたいと思っています。

—今でもあの地震が憎い、何で自分たちのところに来たんだろうとかは思いませんか？
ほんとに65年もここ（中）で生きてきて、ここで葬式を出してもらえると思ってたのにこんなことになるとはと思うと涙が出て。ここ（中）で葬式を出してもらいたいと思っていたのに。

—長い間生活してきたのに、いまさら仮設で生活しなければならないと、地震さえなければと思いますよね。僕はたまたまここに来て、僕らが直撃を受けてもおかしくなかったので。僕らに協力できることがあれば何でもしたいです。

ありがとう。

—今日はあったかいですね、散歩にちょうどいいですね。あっ、猫が来た。
この地震の時にはこの猫がたまげて、そのときは縁の下にでももぐっていったのか、ほんっとに一目散に逃げていったんです。この猫は家に来て5、6年になる。地震のときは出たけど後で戻ってきて。逃げたばっかりのことはどこでどうしてたかわからんかったけど。仮設では飼ってはだめってことで、誰かにもらってもらおうと広告出して、2、3人飼ってもいいという人はいたけど、その後、仮設で飼ってもいいってことになって連れてきた。かわいいです。飼っていればね。

—今年は仮設住宅はひと段落で、今後は復興住宅に移ると伺ったんですが、地震がなければという悔しさはあると思うんですが、不安はありますか？
住んでみないのでよくわからんけど。年寄りは階段が一番おっかない。階段の無いところに住めれば一番いいなと思うけど。

—そういう不安もありますよね。病院が近いとか何かあったときなどすぐに来てもらえる場所というのはいいですよね。
はい。町の中はお医者さんがね。前は山奥だったから大変だったけど。

—地震の怖さをもっと若い人たちに知ってほしいとか伝えていきたいという思いはありますか？
何かあったときにすぐに飛び出れるような用心はしておいたほうがいいですね。どんなことが無いとも限らないから。雪がすごくて逃げる場がなくなったりすることだってある。

—地震は縦揺れだったんですよね？
縦揺れは見たことも会ったこともなかった。

—浮くような感じでしたか？
はあ。縦揺れで縁の下の柱、ほぞって言うんだっけが外れた。横揺れだけなら外れることなかったと思うけど。今までの地震といってもゆらゆらと横に揺れるくらいだった。よっぽどでなければ逃げているうちに止んでしまっていたが、このたびのは本当に長く揺れていた。おっかなくて家ん中にいられるもんじゃない。

—お孫さんたちも長岡に至りで、親族が近くにいるというのは心強いですよね。

そうですのお。

—みなさんと協力して乗り越えてほしいです。僕たちも協力してゆきます。一緒にがんばって乗り越えましょう。
ありがとうございます。

—区長さんはいい人です。やさしいし、人望もあるし。
いや、そんなことはないですよ。
でも年寄りを大事にしてくれるからいい子です。今、テレビを見ていると、親が子を殺した、子が親を殺した・・とでている。どんな育て方をしてるんだろうなと思う。想像がつかない。茨城から帰ってきたら、おいら父ちゃんは「風呂に連れて行くから支度せえのお」と言った。「そか～。大変なときにいいがだろうか」と思ったけど。寺泊の温泉へ、一晩泊まりで連れて行ってくれた。おいらこの若いのはいい子でありがたいと思っています。

—すばらしいいですね。これからも協力して乗り越えていきましょう。今日は貴重な時間ありがとうございました。
いやいや。私のつたない話ですみませんでした。

文集の原稿収集には関係者の努力を必要としましたが、被災者には作文の苦手な方が多く、IVUSA、中越復興市民会議、新潟大学震災ボランティア本部の皆さんに被災者の声の聞き取り、テープ起こしなど支援をいただきました。聞き取り後の文章も方言の問題等で手を入れさせてもらいました。協力いただきました方々の足跡を残したく思い、インタビュー形式の原稿も残させていただきました。
編集担当者

土地と人生がいっしょだからね

諸　橋　長　一

震災で田んぼにも家にも被害は大きかった。田んぼは自分で食べていくくらいしかないが、なかなか田んぼを直してもらえない。整地してブルドーザーかけて、それから何年米作りできるだろう？だからといって落ち込んでもいられない。家は部落の上のほうにあって家はまだ直しておらず、そのままにしてある。とても住める状態ではない。

地震のときは自分の家にいた。最初は地震だとは分からず、何が起きたかと思った。夕飯を食べ始めたところで２回ほど上に突き上げられた後、横揺れがきたのだった。家の回りの道路は崩れなかったが、裏の排水用の池は崩れ、県道沿いの道は弱かった。その日のうちにセンターに避難した。

次の日は家を見に行った。自分で水道をひっぱっていたが、それに泥が混じり水道が使えなかった。それから約１ヶ月、センターでの長い共同生活は間仕切りもなく大変だった。センターだけでは足りず、半蔵金小学校の建物を使い、80軒ほどの世帯の人たちが一時は全員半蔵金小学校に避難した。半蔵金のような山の中で大地震に襲われるとは夢にも思わなかった。役所側もどこがどう被害を受けたかが最初はまったく分からなかった。調べていくうちに半蔵金が栃尾で一番ひどいと分かってきた。その日、役所からおにぎりが届けられた。自分の家にそのままいた人もいたが、村全体でまとまっていた。

仮設に入ってもう1年半が過ぎた。4月末に半蔵金に行ってきた。苗代を作ろうと思ったがとても作れそうもなかった。今年は遅雪が多かったせいで、積もっている下のほうの雪がなかなか融けていかない。それからも半蔵金にはたまに見に行っていたが、何が出来るわけでもない。苗でも起こすとすると色々と大変でなかなかできなかった。

今の仮設住宅での生活は楽と言えば楽だが張り合いがない。女性は仕事もしているが、男はなかなかできない。ここでの生活にはもう慣れた。ご飯も早いし酒盛りして汗をかくこともないけど体は元気。何もしないでいると呆けてしまうも早いので、たまには山でもプラプラ散歩でもしてみよう。外で人と接してみるのもいいかな。少しは生活に張りがあったほうがいい。

仮設に住んでいた半蔵金の人も結構減ってきた。新しく家を建てて帰る人はほとんどいない。修理をして帰っている人は何人かいる。家を建てる土地はあるようでなかなかない。山の上に作っても後が続かない。継いでくれる人がいない。雪が降らなければ、もっと住みやすい。今まで住んでいた家は屋根が広かったけど、すべて手で下ろしていた。下の落とした雪を処理するのもとても大変。1年に10回くらいは雪下ろしをする。今は新しいところに住むことが希望。そこに入れてもらえなければ行くところがない。

うちは大体30代続いてきた。昔は1代20年と考えても600年。半蔵金の中でも古い家。図書館で調べて分かった。地震で揺れた時に、家の蔵の中から嘉永6年に栖吉から大工が来て蔵を作ったという紙が出てきた。半蔵金には大工がいなかっただそうな。倉の中を探せばもっと色々と出てくるかも。戊辰戦争のときに持って逃げてきたタンスもある。こんなふうに地震で仮設住宅に来て自分の家の歴史を調べるきっかけにもなった。

この栃尾の仮設住宅住民がまとまって共同作業することができていると思う。みんなで作りあげるこの文集も、立派な文集を作ろうというのではなく、ありのままの文を書きたい。

地震は、おっかないね

諸橋サチ

地震があった時、私たち夫婦は半蔵金にいました。家の外が「ガーッ」て鳴って、外にでたらそのまんま帰れなくなった

仮設住宅に入るまでは半蔵金の避難所の学校にいました。避難所の最初の頃は栃尾の弁当屋から温かい弁当がきていた。それから何日か過ごすうちにだんだんみんな落ち着いてきた。避難の学校で一ヶ月くらい生活していました。避難所はみんなでわーわーやって楽しくやっていたよ。つらくはなかった。

どうにか家で過ごせる人は家に残っていたけど、私の家では水がとまったので仮設住宅に入ることになったんです。仮設での暮らしは、夜は早く寝るし朝5時には目がさめる。食生活で不自由はしないよ。生活はそんなに苦ではないですよ。怖くはない。夜7時には鍵かけるし。寂しいとか、おっかないとかはない。

父さんは地震があった日から救急車で運ばれて、今も入院しています。病気で動けないし、若ければいいが74にもなれば先がみえるし。家に戻ったら、水もくみにいかなければいけないから大変。今後、半蔵金には帰らない。お父さんも私がお見舞いに行くと、笑顔が違うみたい。だから病院に行きやすい復興住宅に行こうと思っています。

秋になって復興住宅決まったら、半蔵金からタンスか何か持っていかないといけない。うちにタンスとかはあるのでいい。なんにもいらないって。この仮設にある家具やテレビは車で半蔵金からもってきた。

今年は雪がすごかったけど、ボランティアさんがきてくれたからみんな助かった。私たち女は屋根上がるなって言われたよ。年とってる人はなおさら上がるなって。今年はボランティアで助かったよ。ボランティアの学生がきてくれるのは嬉しいよ。半蔵金の雪もここよりすごかったよ。見にいったけど、雪で玄関から家に入れないのよ。前の方回って2階の窓から入らんとならん。屋根を落下式に直したけど地震で壊れて、もう直せないね。せっかく直したばかりだけど壊すよ。しかたねえ。

一寸先は闇だね。地震が来るとは思ってなかった。自分が何年生きられるかも分からない。先のことは分からない。父さんも生きてるし。自分の親や夫を捨てるわけには行かないからね。

でも地震にはもうあいたくないね。これからの不安とか特にない。復興住宅はここと同じようなものだと思うけど。荷物運び出すのは大変だかな。

息子は東京にいるけど、いまさら田舎に戻ってきたって仕事ないだろう。むこうにいれば社員で普通に働いてられるがね。半蔵金の水が止まった時から覚悟決めたんだ。復興住宅へ行く。いらんこと言うと迷惑だからね。

また水が流れても半蔵金には戻りたくない。父さんもいるから、病院が近い方がいい。医者がいるとこがいい。

地震はおっかねえ。もうあんな思いはしたくない。たまに小さい地震とかきても、またかと思ってしまうよ。

何かあった時は協力しないとね

渋谷春夫

十月二十三日の地震のときは栃尾の町のスーパーに買い物に行ってての。いきなり縦揺れがきたもんだから、びっくりはしたけどあわてたほどでもなかったな。そりゃ物が落ちたり倒れたりはしたけどね。お客さんも少なくて誰も怪我もなかったしね。ただ店員は右往左往して大変そうだった。それからもう1軒のスーパーにも寄ったんだけど、そこでも従業員が忙しそうに点検やらで動き回っていた。そのうちに建物が倒壊する危険があるのでお客さん店外に出てくれってコトで外に出た。店の近くに末の娘の嫁ぎ先があるんで見に行ったこてね。いやその家でも二階の床が落ちそうだとか、仕事で出た婿が、群馬から帰れそうもないとか、大騒ぎでしたよ。少し片付けを手伝って、夕方自分の家に帰ろうと思って警察に道路状況を聞いたら、二本ある道路が両方危険で使えないってことだから、しょうがない。そのままその家に泊めてもらって、翌日ようやっとの思いで家まで帰ったんさ。

その後実家の状態をみたり、周りの土地や建物の様子を見て、何とか片付けて生活してた。娘のとこの婿も帰っててきたようだし余震も続いてたけどもね。そした十一月八日に二度目のでかいのにやられたんですよ。今度はいくら豪雪に耐えてきた家でも参ったね。住めるもんじゃないんで区長さんに相談したら、市民会館に避難しろってことだから行ってみました。いや、車が使えて良かったよ。市民会館に行ってみると、隣村の人たちがみんな避難しているんだね。隣村は丈夫な家が多いんだが、道路がひどくやられて水も泊まったんで全村避難したということだった。その仲間にしてもらって隅のほうで寝袋で寝ましたよ。そこで二日たったら、今度は道の駅に行ってくれってんで行きました。そこには知り合いもいなくてつまらない。それで実家の国道沿いに作っておいたスーパーハウスを何とか住めるようにして戻ったんだ。電話も洗濯機も置いといたんで何とか生活できた。壊れたとこもあったけど、一人でいるには十分さね。

それでも十一月の半ばともなると寒くてね。材料が金属なもんだから朝晩の寒さったら無いんだ。困ってたら、仮設住宅ができることを聞いたんで早速申し込んでね。それでこの部屋に住むことになったわけさ。そりゃあ自分の家が一番いいよ。ただ七十才も過ぎて借金もできないし、家なんか直せるわけもない。俺んとこだけじゃないんだから何とかしてくれなんて、国や県を頼るわけにもいかんだろう。市役所に何度か足は運んだけどね。

ただ国や県が復興を大きく取り上げているわけだから、住民と担当者とか、もっと早く話し合いってことをやらなきゃね。基本は誰しも生まれ故郷を離れたくはないんだから、全戸を作ってやるなんてとても無理だろうから、地域に分けて集合住宅を考えるとかなんとか意見も出たと思うがね。まあこうしてなんとか住める場所を用意してもらって、文句ばかりも言ってられないでね。ここに住んでみると、一人用だからって狭くて不便を感じたね。物を隠すところもない。1年目の冬は結露も大変だった。俺んとこだけじゃないさ。みんな結露には悩まされたんだ。部屋の天井から水が落ちるんだから。それでも除湿機をいれたり工事をして今はよくなっている。

ここにいると、みんなに買い物や用事で送り迎えをよく頼まれるし、お茶のみに行ったり来たり、敬老会やら生涯学習で孤独になんかなりっこないね。夏はラジオ体操をしたり、毎週集会場の集まりもあるしな。他にも共同作業やったり、お楽しみ会もある。結構忙しいよ。

冬の雪堀に学生のボランティアが百人も来てくれて、友達ができたりもしたよ。二十才くらいの女の人で、その人の母親から便りをもらったりしてうれしいことだ。俺も返事を今度書くんだ。助け合いの気持ちってのがありがたかったね。感動しました。

この秋には完成する復興住宅に申し込んであるから、そこに入れてもらいたいね。そうしたら子供を頼ることもないし気楽だしな。その後は施設のお世話になれればいいさ。そんなに欲をかかないで、たまに畑にでも行って、歌って踊って退屈しない毎日ならいいじゃないですか。

地震でやられたけど離れたくない

諸　橋　左　一

地震の時は二人で半蔵金の家にいました。ご飯を早く食べてさ、ゆったりしてた。そいで寝巻きを着てテレビ見ていた。そいだら、「どっかん」ってきて、その瞬間は「来たな」って思った。揺れたときはもう冷静じゃなくなって、足腰が立ってらんねかった。そしたら、満タンにしていた石油タンクが耕運機のところに倒れて、タンクは500キロもあってもう起こせなかった。外に出てみたら、まだ飯食ってない人や、風呂入ってないって人もいた。家が倒れて挟まれたわけじゃないからよかったし、半蔵金は火事がなかったからそれでもよかったよ。

昔に新潟地震があって、その時は避難もしなかったけど、池とか田んぼの水が地震でガバンガバンとなってみんな飛び出してきていた。まぁでも今回の地震は新潟地震より凄かった。

地震の後は、みんなでセンターに二日泊まったよ。その後、何年か前に廃校になった学校（やまびこルーム）に移って一ヶ月泊まって、体育館や教室にみんな村中の人がいた。そこでの生活終わるまでの一ヶ月、毎日朝晩に無料で弁当が差し入れしてもらっていたんだ。うちの娘も、住んでいる埼玉から家族と自分の友達と150人分の蕎麦を作って持ってきてくれて食べさせてくれていった。皆さんがそうして助けてくれて、皆さんのおかげで助かってさ。

地震から何日かしても余震がまだ続いて家に帰れない日が続いた。そうして、仮設住宅にはいれたのが11月の27日。鍵もらって一番最初からここ入った。最初、仮設の住み心地はすごく怖かった。若いもんは下宿とかしていて狭いとこ慣れているだろうけど、山のほうに住んでいた年寄りは狭いとこ慣れていなくて。でも、今はここに慣れてしまったんだけどね。

入った時、電気はあるども電話がつながるまでが遅くて携帯買ったんだ。テレビはうちの子供が取り付けてくれた。困ったのは屋根の除雪や結露。結露は天井から水滴が落ちるくらいになったから、どぶろくのビンに溜めたり、部屋の目張りしたり、除湿機を置いたりして何とかしてきた。

ここにきてからは、写真や習字なんかの趣味が一個もねえから頭が呆けてくる。バイクもねえし、趣味もねえし、大事な「べと（土）」取り上げられちまったらどうにもならねえ。家に帰りてぇけども帰れない。壊れているたって、補強すればもう20年や30年はなんとかなるんじゃないかと考えてしまうよ。地震から薬もらってるけれども、治らんでどうしようもねえ。元気が出る薬飲んでるけど、それでも夜寝られないんだ。

仮設住宅に住んでいる人たちは同じ境遇の人だ。でも、これからそれぞれが家作ったり、新しく生活が始まれば、もう縁が切れてしまうのかなと思ってしまうよ。

世の中はよくできていて嫌だ。家では夏も冬も15℃くらいの湧水がよく出ていたんだ。そこにニジマスかったりイワナかったりしてさ、秋刺身にして食ったりして楽しんでいた。庭

に七面鳥とか飼ったりもしてさ。それがみんな地震でだめになった。それからその山から地震で水がでないように、みんなボーリング掘って山からみんな水抜いてしまって、水が止まってしまう。生きてらんね。おいらは水と共に生きてる。水で魚を飼ったり屋根の消雪したり、そうしてるから水がいっぱいいるんだ。

県の主管道路は除雪してあるけど家の周りは雪でいっぱいだった。危ないところには行かないように言われては、地震で道が壊いたところなんて行くことができないわけだ。そしたら、仮設から家に行くといっても、スコップ持っていかなければならないってことだ。

年とって半蔵金に住んでいるのは難しいんだ。住んでる人が大勢いればいいども、大勢いないしな。年を取ると大変になることがいろいろ出てくる。医者もいない、救急車も時間がかかる。雪が降れば道なんか見えないし、若い人じゃなければだめだ。今は年寄りばっかで若い人なんかほとんどいない。今いる子供が大きくなるまでに村が持つかどうか。

冬怖くてもそこで生活するために毎日過ごしていたんだ。おいらは半蔵金の山の中で育ってきたのだから。

今、半蔵金の家はガラスとか危険なものを片付けて靴下で歩ける程度に掃除はしてある。道路がなくて大工が入ることができず、玄関も傾いて戸が開かない。それでも行きたいんだけどね。

田んぼができても、道路ができないうちはだめだ。田んぼができても水路を確保して用水引いてこなければだめだ。それ三つが揃わんうちはだめだ。

道とかはそのうちに直る。ただ、人間がここで復興するために時間が必要だ。その時間が経っても自分の年齢が止まってくいるといいんだが、自分の年齢も進んでいくから。後継者もいない。

でも、ずっと半蔵金で生まれて育ってきたんだ。離れたくない。

村　越　佐恵子・信子

（母）あの日は文化センターで「おかめかぼちゃ」の展示会をやっていました。私はそれを見学に出かけたし、娘は専門学校とアルバイトに行ってました。買い物をして家に戻ると娘はまだ帰らない。いつもの友達のところで遊んでるんだろうと、心配もしないで夕食の支度に取り掛かったところでした。冷蔵庫の扉を開けた瞬間、「どーん」と言う感じであの地震が来たんです。家具は倒れる、仏壇から道具は飛び散る、すごい音と家のホコリと、すごい揺れ。それでも火事は怖いので、火を止めて、電気のブレーカーも落として安全そうな畑に四つんばいになっていた。飼っている犬が、今まで聞いたことのない悲鳴のような声で鳴いていて…そこに娘が帰ってきたから「バカヤロー」って叫んじゃいました。近所の明かりが点いて、停電は終わったとわかったけど怖くて畑で抱き合ってました。足に障害のある隣の方が車に乗るよう言ってくださった。助かりました。主人は秋田に単身赴任中ですし、長男は都内で独立していて、このまま家族がバラバラかなあって、ほんとに心配になりました。後で聞いたら、二人のいた秋田や東京でも揺れたみたいで。

９時頃ようやくおさまってきたので連絡をとろうとしましたが、なかなか通じません。隣の方の電話で長男に連絡が取れて、私と娘が無事だと主人にも知らせられました。それで家に入って少し片付けましたが余震も来るのでとてもいられません。一晩だけ町内の役員の方の家にお世話になりました。食事も出してもらいほんとうに助かりました。夜が明けたら避難所になっていた市の文化センターや体育館に行こうと思っていました。夕方で暗くなっているので物凄い恐怖感があったんです。

翌日は家の状態を区長さんや市の方に見てもらいました。もう少し傾いたら半壊になるような壊れ方でしたが、判定は一部損壊でした。たいしたことはないということでしたが、古い家だし、住んでいた者にしかわからない傷み方もありそうでとても入れません。燃えきった炭のように、外側から見ても我が家は大丈夫なようだけれども、中はすごく傷んでいて床板に隙間ができていたり、ズーッとヒビが入っていたんです。半蔵金や西谷地区はもっと大変だからという見方もあったり、不安や恐れをわかってもらえませんでした。

地震からしばらく後に主人が駆けつけてくれて、一緒にお墓の様子を見に行きました。倒れてはいなかったけど、向きが変わっているほどでした。不安を解消したくて、自分達で知り合いの大工の方にお願いして家の状態を見てもらいました。ガスや電気も大丈夫だったので一安心し、家の中も見てもらい、傾きはあるものの柱はしっかりしているということだったので少し安心しました。とりあえず茶の間にお布団を敷いて、枕元には財布とか大事なものを置いて寝起きするような生活をしていました。

雪は降る時期になっても余震が続き、新幹線も不通で長男も帰ってこられない。家の中もまた大分壊れてきたりしました。私自身、地震のショックで仕事を休んだりし

ていました。

誰も助けてはくれないんだなと思うようなときもありました。近所にも冷ややかな目で見られたりもしました。それだけでなく、お世話になった方が凄く感情的になっていることも言われたりしたので、尚更、次の住まいを探さなくてはと焦るようになっていました。そんな中、仮設住宅が空いていることを言われ、地震から少し日が過ぎてからですけども、怖い思いをしているよりはと思い、仮設では飼えないペットを家に残し入居しました。今も通って世話を続けているんです。

土地はあるけど、これから借金をして家を建てても、夫婦二人になったときに退職金でも足りなかったら嫌だと思い建て直すことはできない。だから、公営住宅に申し込んで、それがダメなら民間のアパートとかを探して、という感じなんです。

地震の後は、町内の対応にも格差を感じました。物じゃなく、心のフォローがもうちょっとあれば、あんなに落ち込まなくてもよかったのかなと思います。人の気持ちというのは一大事が起きたときによくわかるというか、口先だけの人と本当に真心から言ってくれる人と違うんだなと思いました。仮設に来てから、区長さんをはじめ班長さんには「つらいときはみんな一緒なんだよ」と言ってもらいました。今度何かあった時は、人にちゃんとよくしてあげたいと決意しました。

（娘）地震当日、昼間バイトをしてから友達と遊びに出かけていました。その時の天気は気違い天気というのか、少し変な感じでした。バイト先に傘を忘れ、夕方に取りに行こうと近くまで来ていたら、山のほうで稲光みたいなものがバーッと走り、光ったと思ったらもう、ドーッと揺れて。あの光はなんだったのか、城山全体に光が走るというか。

尋常じゃない揺れで怖くなって、地震の中を斜めになりながら走ってやっと家に帰ることができました。揺れがおさまったと思っていたら、また余震が続いたり、周りの人とのことで気分が重くなっていく毎日でした。気持ちもなかなか落ち着かず、学校も休みがちになりました。一時は辞めたくなったけど、なんとかホームヘルパーの免許も取りました。

その頃、仮設への入居の話を聞き安心しました。期限は決められているとしても、その期間だけでも気持ちが少しは落ち着けばいいなと思っていたから。ここに来たことは決してかっこ悪いことじゃないし恥じゃない。犬の世話で通うのはとてもたいへんだったけど、他人が心配してくれても、人の腹の中なんてわからないから。地震の後、学校はガスや水道が一ヶ月くらい全部だめになっていて被害の少ない人は普通に通えることができていたけど、栃尾からはいつもの２倍くらい時間がかかったり。家に帰ってくると震災後の現実で気分が落ち込んでいました。

（母）家の中の物を片付けるのに１ヶ月くらいかかったが、子供のものを処分したり、大切な仏壇が壊れていたのがとてもショックでした。

（母・娘）やっぱり栃尾を離れたくない。すごく密接な関係の人達で、サザエさんのような感じだから。お店も三河屋さんみたいな感じで。だから、隣にどんな人が住んでいるかわからないようなのは考えられなくて。「お母さん元気？」とかそんなことを言い合える関係がいいんです。

（母）冒険して東京の長男のところへ行くことも考えたけど、環境が違うとやっぱりね。子供達には迷惑かけないように、自分達のことは自分達でしなくてはいけないと思ってます。

（母・娘）どこにいても生きてくうえの使命みたいなものがあると思うから、生命力豊かに生きていこうと思います。

感謝の言葉

多くの方々のご協力で此処に現実となった震災文集発行の喜びは計り知れないものがあります。

地球上のどこかで温暖化がもたらす災害とは思えない地球の活動期ともいわれる説の大地震が世界各地でおきいる中、私たちの中越地区に川口町を震源にして震度七の大地震が起きた。私の住む栃尾では震度六強であった。市の中心部から南に八キロ、山古志よりの中部落だ。十月二十三日は妻と旅行中で家にはいなかったが、十一月八日の地震は余震ではなく新たな地震と言われているくらい八日の地震の方がはるかに大きく被害も大きかったと部落民は口をそろえた。平地と違う中山間地での大地震では夜の暗闇であると道が抜け落ちていたり山崩れ等で危険が一杯である。

仮設住宅に入居し、私の中部落よりも地形の険しい半蔵金、栗山沢部落の方達や多くの人から話しを聞き、自分の避難所での経験等を文章で残すことを決意した。

市役所に行き一名の協力者を得ました。助役さんに私の気持ちを話し、社会福祉協議会の職員の方にも編集委員の一員にと参加のお願いをしました。仮設住宅全世帯とその住民を送り出した地域の区長さん、地域に残られた方にも原稿用紙を手渡しお願いいたしましたが中々思うように原稿は集まらなかった。文を書くことは苦手と断られても、一行でも詩に歌ってもとお願いを繰り返し、原稿用紙を紛失した人には再度お渡ししてお願いした。

そんな折、中越復興市民会議の方や国際学生ボランティア協会（IVUSA）の学生の協力で聞き取りで住民の声を録音しテープ起こしによる文書化する方法に切り替え、関東や新潟の大学生がテープ起こしを引き受けてくれた。学生さんには方言となまりを文書化することは並々ならぬ苦労があったが、悪戦苦闘も多くの方の協力とご支援があって発刊にこぎつけた。

ご支援ご協力下さった組織個人の多くの方々に心より感謝申し上げます。

仮設住宅団地区 区長　千　野　義　夫

任務を終えて

生活支援相談員　小　林　武　夫

2004年10月23日の中越大地震から半年あまりの翌年6月1日、目黒栄利君と私は、新潟県が設立した「中越大震災復興基金」の事業の一つで「生活支援相談員設置」により「生活支援相談員」として仮設住宅に派遣されました。

仮設住宅には既に「社会福祉協議会」によって「復興ボランティアセンター」が開設されており、私達はそれを引き継ぐ形で活動を開始しました。そのため当初は「ボランティア」として認知されていたようです。

私達の最初の仕事は、仮設住宅に入居している人達を知ることでした。住宅配置図と表札を頼りに、一日に何回も巡回し、住民の方と接触することを心掛けました。

なかでも重要だったのは、独居世帯の見守りでした。これは「阪神・淡路大震災」の仮設住宅での「孤独死」が多発したことによるものです。

仮設住宅を巡回して分かったことは、その狭さです。特に独身者用は四畳半相当の一間とDK。荷物を置けば寝るのがやっとという狭さに驚かされました。

さらに狭い台所、追い焚きのできない風呂、冬になれば雨漏りのような結露、夏は鉄板で炙られるような暑さ。あくまでも仮設の住宅といえばそれ迄ですが、生活の不自由さ、狭さからくる息苦しさは私達が想像する以上に大変なのではないかと思います。

私達が赴任した時には落ち着いている様に見えた住民の方々も、各家庭では再建に向けてのいろいろな悩みや葛藤があったことと思います。

私が勤務した10ヶ月の間、仮設住宅の人達に対して、どれだけの支援ができたか。顧みれば、はなはだ微力であったと思わざるを得ません。

しかし盆踊り大会をはじめ、いろいろな行事のときに仮設の人達がみせた、あのエネルギーと団結力を発揮する切っ掛けをつくってくれたと思ってもらえれば幸せなことです。

最後に私がこの任務について、一番感動しうれしかったことは、仮設住宅の人達が、まったく面識もない私達を、なんのわだかまりもなく受け入れてくれたことです。

任務を離れて半年以上が過ぎました。仮設住宅の情報に接することは少なくなりました。

しかし、私は仮設住宅で出会った人達のことは、生涯忘れることは、ないだろうと思っています。

震災と地域のこれからと

生活支援相談員　目　黒　栄　利

三十年ほど、実家を離れていて帰ってきたのが七月の大雨の頃。ひと月もしないうちに村の寺が燃え落ちた。いよいよ落ち目か、と思いつつ運転免許を取得するため教習所がよいで九月を終えた。仕事も決まらない状況で母親の畑仕事に付き合っているうちに十月も半ばを過ぎて、久しぶりの故郷の晩秋を味わいながら、忘れ果てた雪ほりの心配など考え始めた頃だったろうか。

七十代半ばの父母と三人分の晩飯のしたくの時間だった。とにかくその場でたち続けるのがやっと。地震とは思ったがこれほどの揺れが襲うとは。直後に停電したらしい。茶の間の親の声が聞こえたような、叫び声か？それよりこの場では危険だ。窓から飛び降りようか。俺の人生もここまでか。そう思っているうちにしばらく揺れがおさまり親子三人、なんとか戸外に避難した。何とか命を落とさずにすんだ、と思ってもしばらくは余震に悩まされ、裏山の地すべりを心配もしたがほかに寝るところもなく、度胸をきめてそのまま家にいることになった。兄弟や親戚と連絡もとれず停電も続いたが、水は井戸のおかげで不自由せず、ガスも使えたため何とか一日、一日を送ることができた。

新聞はほぼ正常時間に到着したし、ラジオもあり車での買い物もできた。道路の封鎖も村より奥の地域だったので私の住む村はたすかったと思う。ただ報道による中越のおおくの地域の被害は想像をはるかに超えていた。何もできず、仕事も決まらないまま冬になり二月には数年ぶりの大雪に見舞われた。親の進めもあってボランティアでの雪ほりや仮設住宅への引越しの手伝いなどに参加したりで冬を越したが、子供時代を思い出す雪の量だった。

それでも春は忘れることなく、冬を脱ぎ捨てるようにやってきた。陽光は何者をも等しく照らし、暖をあたえる。雪の重みに踏みしめられた畑に鍬を入れ終わった頃、連絡をもらい仕事をくれると言う。仮設住宅に勤務し住民の支援が仕事ということだった。都内で宴会業に身を置いていた自分にとっては、まったくの白紙状態からお世話になることとなったが、多くの方に迷惑をかけながらなんとか今日を迎えている。仕事の関係で被害状況の大きい地域、そこに暮らす被災者に接する機会に恵まれた。見る目のない自分からみても、田畑、宅地、道路、水路の傷みかたは激しいし、赤肌をみせる故郷の山々も痛々しく感じた。その地に生計を立てる人々の思いやいかに。ところがどうだ。被災地でも、仮設住宅でも、みなさんとても元気なのだ。それぞれが立ちあがれないほどのダメージを受けているはずなのに。驚愕であった。

私の親の世代である昭和一桁世代にとっては、戦争から今日までまさに激動の時代を生き抜いているわけで、大震災でも過去の災難と比較すればたいしたことはないのだろうか。

それとも子供も成長し、孫の顔も見て人生一代の責任をまっとうされた安心感のほうが大きいのであろうか。個人差ももちろんあろうが単純には割り切れない問題に思える。

どうも今回の地震の害は、個人としての人間たちへだけではなく、数百年かけて形成されてきた村、人間社会、コミュニティに対してより大きく影響しているように思える。地震以前からの過疎地、担い手不足、高齢化の問題をより顕著に現してはいないか。そう考えると水害、地震、雪害等の自然災害は、現代社会への警鐘とも思えるし、集中と巨大化傾向に限界をみせない資本主義への地球からの警告のメッセージとも思える。

今回の災害では、個人、企業、国、県から多くの支援をいただいている。多数の感謝の声を聞く機会に出会った。これからも被災地、被災者の声を届ける役割に微力ながらかかわりを持ち続けたいと思う。過去への回帰はむろん不可能であるが、復興への努力をつづける多くの方々に感謝しながら、これからも皆さんの笑顔に出会うために生きてゆきたい。

震災からの復興へ

生活支援相談員　小　林　洋　介

突然の震災が新潟を襲い甚大な被害をもたらしました。自分の中では地震というものの怖さをほとんど意識しておらず、我が身に降りかかったときに初めて恐怖を実感しました。余震に怯え過ごす時間、連日目に入る各地の被災状況。それでも自分のまわりの状況に目を向けて動くことで精一杯であった毎日でした。全国からの被災者への支援をいただき、その想いの多さに驚き、感謝の気持ちであふれていました。

そして、生活支援相談員として着任し、それまでよりずっと近くで被災住民の方々と接してきました。仮設住宅区に机を置き、支援活動していく中で、震災によって変えられた生活、復旧・復興が進められている現在、新しい生活などへの想いを聞き、感じてきました。自分はそこから何をしていくことができるのかを考えてきました。

活動の中でいつも感じるのは人のあたたかさであり、行事だけでなく共同作業やお茶飲み会、みんなでビールケースに腰かけて世間話をしている時もヒマワリのような笑顔を浮かべている姿を見ると、こちらが元気をもらっているような思いになるのです。

被災者の方々と支援活動をなさっている方々と接する中で、復興を目指す気持ちの強さをひしひしと感じ、復興への大きな力となっていることをすばらしく思いました。多くのボランティアの方々がつながって輪を広げ、復興への歩みを進めてくれる。もっとつなげていくことで、さらに大きな力と成るんじゃないか。だからこそ、人と人とをつないだ復興を進められるように活動をしていきたいと思っています。

編集後記

この度の仮設住宅住民文集「大地の牙」編集、発刊にあたり、多くの方々、団体のご支援ご協力を賜りました。この文集は、まさに皆様の善意の集大成と思います。誠にありがとうございました。被災者にとりましても誠にありがたいことと思います。そして原稿の依頼、聞き取りに快く応じていただいた被災地域の方々、仮設住宅住民の皆様に心より感謝申し上げます。

惜しむらくは、直接の作業を担当させていただいた私どもの（栃尾地区生活支援相談員）力不足で、被災者の皆様からの情報、原稿が十分に編集できているかどうか危惧するところです。配慮が足りずに間違いなどございましたらご一報いただければ幸いです。先月十月二十三日には、あの中越大震災から二周年を迎えたこの時期、仮設住宅住民もそれぞれの転機を迎えられております。地域の被災者、仮設住宅住民の方々は、まだまだ復興への途上で努力されているところです。今までもご協力、ご支援いただいた皆様のますますのご健勝と、被災者、被災地への今まで以上の暖かいご支援をお願いいたしまして編集後記とさせていただきます。

2006年11月3日　担当者一同

復興に向けて頑張る